成寿

SEIJU

2008年
第39巻

冬季

特集

思い出の中に、善光寺の新たなスタートを

開山忌

二世中興 大圓武志大和尚 報恩供養

開山忌 焼香師 本寺光真寺住職 黒田俊雄老師

大圓武志大和尚報恩供養 焼香師 大乗寺山主 東隆眞老師

頂相点眼法要

頂相の説明をする博志住職

開山楳庵白純大和尚頂相の前にて

平成二十年二月九日、善光寺釈迦殿において開山忌と合わせて大圓武志大和尚報恩供養が行われました。開山忌は大田山光真寺住職黒田俊雄老師、大圓武志大和尚報恩供養は大乗寺山主東隆眞老師にお勤め頂きました。釈迦殿には関係のご寺院様、檀信徒総代、親類縁者をはじめ、善光寺と大圓大和尚にゆかりのある方々が集いました。

大圓武志大和尚報恩供養では、昨年、第十二回育英生胡建明師より贈呈された大圓武志大和尚の頂相（ちんぞう）二幅の点眼法要も執り行われました。この頂相にいただいた賛は当日の導師を勤められた黒田俊雄老師と東隆眞老師によるものです。壇信徒総回向、黒田俊雄老師、東隆眞老師のごあいさつに続いて、長年善光寺の発展にご貢献をいただいた、檀家総代梅澤道雄様、城下栄三郎様、頂相をご贈呈いただいた胡建明師に善光寺

梅澤道雄さん

頂相の作者胡建明師

城下栄三郎さんの奥様（代理出席）

から感謝状が贈られました。

祭壇に並んだ頂相とともによみがえる大圓大和尚の在りし日の思い出。熊谷総代のごあいさつにも大圓大和尚の姿が鮮明に写し出されていました。そして、締めくくりは博志住職のごあいさつ。自身の結婚と育英会再開の報告と『宗祖を通して釈尊に還る』大圓大和尚が大切にしていた開山忌の意義を参列の皆さんに伝えました。大圓大和尚の思い出とともに過ごした温かいひとときは、善光寺が新しい時代に進むためのスタートの瞬間でもありました。

頂相のご紹介

敬讃善光二世大圓武志大和尚頂相

多年求道訪西東
育英教化顕神通
志仁楽天真徳満
般若光裡圓覚融

平成十九年丁亥五月吉日
光真三十七世光純俊雄書

善光寺二世中興武志大和尚真賛

釈尊両祖直通禅
教化無辺願力堅
証去修来精進徳
圓光炳六十八年
　　露
中興武志大和尚
破顔微笑成寿山

平成十九年八月十六日
加賀梠樹林大乗寺東隆眞敬賛

（注）頂相は描かれている像の顔の向きによって、賛の書きはじめがきまります。この二幅の頂相は向かって左を向いているので、左の行から始まります。

謹啓

初冬の候、御一統様には益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、今回善光寺季刊誌「成寿」第三九号をお届けいたします。

この号は、特に今年二月に行われた開山忌並びに二世中興大圓武志大和尚の頂相点眼法要のご報告や、曹洞宗専門僧堂のひとつである、山形県の善寶寺を特集致しました。

ご高覧頂ければ幸いでございます。

皆々様のご健勝をお祈り申し上げますと共に今後とも尚一層の御法愛、御教導賜りますよう何卒宜しくお願い申し上げます。

謹白

平成二十年十二月吉日

横浜善光寺　住職　黒田博志　合掌

カラー■開山忌・二世中興大圓武志大和尚報恩供養……1
特集●開山忌・二世中興大圓武志大和尚報恩供養　ご挨拶……13
連載●『普勧坐禅儀』に学ぶ　その三……安藤嘉則 21
●長野・善光寺へバスツアー……29
カラー■山形県鶴岡市　龍澤山善寶寺……33
読物●秋季彼岸法会……山口晴通 41
●カリフォルニア大学バークレー校
日本研究センター五十周年記念大会に参加して……黒田博志 53
カラー■不動明王大祭　大圓武志大和尚の遺志を受け継いで……57
読物●おもいやりの心　―見ても聞いても読んでもわからない―……東郷　敏 61
カラー■善光寺旅行会　ご報告……77
読物●善光寺旅行会　参加者の感想……81
●善光寺霊園ニュース……87
●坐禅会・写経会のお知らせ……92
●ニュース・アラカルト……99
留学僧募集のお知らせ　96
読者のたより　105
編集後記　112

題字・イラスト　伊藤三喜庵

巻頭言

善光寺住職　黒田博志

師父亡き後四年目を迎えました。

「来者如帰」（来る者帰るが如し）前号に記した思いを省みてこの一年、檀信徒の皆様、寺にご参詣いただいた方に対して心より精一杯のお勤めができたのか、お参りいただいた甲斐があったのか、気持ち良くお過ごし頂けたのか、くり返し反省しております。

時の流れは早いものです。この一年も、春先には梅がほころび、椿そして桜が咲き、紫陽花へと順々、時期が来れば必ず咲き、見る人の心をなごませてくれる。

花を見るたびに師父を想い出す。私に師父の声が聞こえてきます。『博志、人間一日生きれば一日の足跡、一年生きれば一年の足跡、生き甲斐とは足跡を残すことだよ。人は人。自分は自分。肝心なのは自分、仏道に徹し、日常行持に捧げ尽せるかどうか博志自身のことだ。わが道をみて、人の道を見るな、これが修行の心得だ』、師父の「ことば」一つ一つが私に大いなる光を与えてくれます。さらにこの一年、師父の大きさを思い知らされました。それを仰ぎ見れば見るほどに高さを加え、これに従い及ぼうとしても、いまの私には及びようもありません。

善光寺では毎年二月に開山忌を執り行っています。諸仏諸菩薩、親、祖先、恩人に感謝報恩の誠を捧げ尽す。これこそ師父の理念『宗祖を通して釈尊に還る』をあらためてこころ致すものであります。来春より師父への報恩行としても再開した『留学僧育英会』を同時に辞令交付の運びとなります。

今号は曹洞宗専門僧堂のひとつである、山形県の善寶寺を特集致しました。このお寺は大本山總持寺副貫主斎藤信義老師がご住職であり、師父も生前度々拝登

させていただきました。六月本山に拝問させて頂いた際に、老師には師父を遠く追いながら想い出話など篤く厚く頂戴いたしました。此処にもまた善光寺の足跡を観ることができました。

又、例年通り、今年一年の山内行事のご紹介もさせて頂きました。

今日の善光寺は檀信徒の皆様、関係のご寺院の皆様方、関係各位さまのおかげでございます。重ねて心より深く深く感謝申し上げます。

今後も師父の心を心として、若輩ではございますが、精一杯弁道精進致す決意でございます。

■特集

開山忌

二世中興 大圓武志大和尚報恩供養

平成二十年二月九日、善光寺釈迦殿での皆様のご挨拶を紹介いたします。

大いなる誓願のもとに

光真寺住職　**黒田俊雄老師**

大変お忙しい中、お集まりいただき本寺としてお礼を申し上げます。日頃、博志住職には皆さまの温かいご支援をいただき、白純大和尚、武志大和尚のその寺門に関しまして厚くお礼を申し上げる次第でございます。曹洞宗は生活の一挙手一投足がすべて仏道に通じることが理想と説かれています。生活を大切にするのが曹洞宗の教義であります。今日、開山忌の法要で、私の師匠である白純老師に報恩の気持ちで導師をさせていただいたことを大変ありがたく思っています。曹洞宗が一万五千の寺を持って、宗門の中でも一番大きいのは、やはりこういう高祖さまの大いなる誓願のもとにあることをありがたいと思うわけです。

殊に、武志大和尚のご親友であります大乗寺

山主の東老師にご来山をいただき、その点眼式をしていただいて、報恩に報いるという心情は曹洞宗の人即仏法、その宗旨に則った尊い情業だと感じました。

私は学生時代、西田哲学に傾倒したり、また般若道場というところでこの先生に教えを乞い坐禅をさせていただいていました。その先生も、「六十歳になったら諸国巡行の行脚に出たい」とおっしゃっていました。今年は私も白純大和尚が亡くなった年になりました。二月四日に亡くなりましたから、もう幾日か師父白純大和尚より長生きさせていただいています。これも白純大和尚と皆さまのお陰と感謝申し上げます。私も早くより自分を捨て人のために尽くさせていただきたいという願心を起こしましたが、なかなか叶いません。

それに引き換え、この若い博志住職は武志方丈の残した留学僧育英会を再開するといいます。結婚したてなのに、そういう発願をされています。法語の中でも申し上げたありがたいご縁です。大乗寺の山主さまのご法語にもありましたように、特に武志方丈は世界を股にかけて仏法を興隆しようと発願実践したあの気概は弟ながら、敬服感服まことに立派でした。生前は、仲よくともに歩んだものでした。

博志住職もまたこの誓願を興し、留学僧育英会を再開するということは最高の親孝行であり非常にうれしく、心から敬意を表します。また、檀家の皆さんにはそういう住職を、どうか、見守っていて、寺の興隆とともに、仏法の興隆のためにもご奉仕くださるよう心からお願いをいたしまして本日の挨拶と代えさせていただきます。

善光寺の持つ意義とともに

大乗寺山主　**東隆眞老師**

ご指名でございますので、ひとこと、ごあいさつを申し上げます。ただいま、ご本寺の黒田俊雄老師の力あふれる、お言葉を頂戴しました。本日は胡建明さんのお描きになったご当山の二世中興大圓武志老師の頂相ができまして、皆さまもご覧になっておわかりの通りですが、実によく先代さんの風貌を表わしていると思います。

立派なものができまして、それに言葉を添えようということでございましたので、しばらく考えて、考えて、考えまして、書かせていただいたようなことですが、本日はその頂相の点眼を行うので、来るようにということで、参った次第でございます。

こういう頂相を「真」と言います。写真という言葉がございますが、あれはきっと真を写す、その人の真実を、真心を写す。それが写真です。これは禅から出た言葉であると私は思っています。頂相は誠によくできています。胡さんも人知れずご努力なさって、これを描かれたことだと思います。こうして拝登いたしますと、ご本寺の黒田俊雄老師、桐ケ谷寺の方丈さま、山口老師、新美老師ほか、いつもお目にかかる方がここに集まっておられます。先代の奥さま、檀家総代の方々、そのほかいろいろな方々の、懐かしい方々のお顔を拝見しまして、そのうち黒

田さんが、やあやあとにこにこ顔で手をあげて出て来そうでなりません。本当にありがたいことだと私も思っています。

思うに先代さんが遷化されて三年が経ちます。この前も申し上げましたが、私は、迷うことがあると、「あの人に電話をかけてみようかな。いや、待てよ。あの人はもういないんだ」と自問自答するということもあります。

私はそれを継いだ博志住職がよくやっていると思います。先代の黒田さんも目を細めて見ているのではないかな。きっと見ていると思いますが。三年経って、さらにこれから正式に住職に就任される。また、おめでたい話もあります。また、二、三年経って、いよいよこの善光寺を先代さまのご遺志を受け継いで、さらにさらに発展させていただくと。

なお、先代さまのお言葉、やっておられたことを振り返り、振り返りしながら、徹底的に先代さまのお気持ちを、ぜひぜひ、受け止めていただいて、失礼ないい方をすれば、まだまだお師匠さまの気持ちを受け止めていただくこと、そっくりそのまま受け止めていただいて、そうして、それがだんだん博志住職のお人柄とお力によって、自然に大きく広がっていって、善光寺の宗教的な意義というものが、このお寺の持つ意味というものが、さらにさらに大きくなっていくことを期待しまして、ごあいさつの言葉に代えさせていただきます。

まことにありがとうございました。

先代の遺志を継いで

檀家総代　熊谷豊太郎

寒いところ、大勢の方が遠くからもご列席いただき誠にありがとうございました。厚く御礼を申し上げます。

先代方丈さまが遷化されて丸三年が経ったわけですが、「去る者は日々に疎し」と言いますけれども、方丈さまの偉大なるお人柄については皆様ご存知のはずと思います。未だに私の心の中に方丈さまのお姿が住みついています。広い知見の持ち主でしたし、洞察力、企画力、実践力、行動力、すべての力の備わったお方であり、すべての人に平等に手を握り、頭を下げ、非常に慈悲深く、そして、いつも感謝の念を忘れない。ありがとうと言っていました。そういった立派なお人柄が私の脳裡からいつまでも離れません。まず、離れることはないと思います。

そんな素質を現住職も受け継いでおるようでございます。見た通りの立派な青年住職として、善光寺を背負っているわけでございます。今日、先代がここに描かれておりますが、懐かしく拝見しながら法要に臨んでいました。留学生育英会の再開も今年から始めるなど、立派に先代の遺志を継いでいます。また、先代と違った新しい感覚の、今の時代にふさわしい、いろいろな催しを考えています。そして、以前にもまして多くの檀信徒の方々が、法要の度に埋め尽し釈

迦殿がぎっしりと立錐の余地もありません。本当にありがたいことです。これからますます住職が大成されることを、祈念しています。

本寺の御前さまと先代が生前に最も親しかった東ご老師に導師をお勤めいただき、白純大和尚さま、武志大和尚さまはさぞお喜びになっていると思います。

もう一つここでお話しておきたいことは、目の前におられます先代夫人倫子さまのことです。東老師の追悼文の中にあったことを記憶しておりますが、三十数年にわたってこの善光寺を先代と二人三脚で築いてきました。この善光寺をつくりあげてきたことを先代は生前、私にしんみりと「倫子がいなかったら、善光寺はなかったよ」と話をしておりましたが、今、頂相を見て思い出していました。今日善光寺を支えて、今の住職を育て上げられたということだと思います。ご遷化される時も安心されて、安らかにほほえんでおられたと聞いております。

私も時折善光寺を訪れて先代のお位牌の前で時を過ごすことがございますが、本日の法要は白純大和尚さま、武志大和尚さまが親しい方々のお集りを喜んで見ているのではなかろうかと思います。

善光寺の原点としての開山忌

善光寺住職　**黒田博志**

本日は開山忌ならびに師父の報恩供養にお詣りいただきまして誠にありがとうございます。開山忌のご導師は本寺御前さま、昨年の暮れで師父の遷化より丸三年となります。昨年釈迦殿とあちらの不動殿の間に新しく観音さまを安置しました。その際光真寺さまにご命名を賜わり、開眼のご法要をお勤め頂きました。以来、ほほえみ子安観音さまにお詣りすると癒されにこやかになれるということで、ご参詣の皆様が必ずお詣りなされている様子を拝しますと、とてもうれしくなってきます。なにもかも御前さまのお蔭です。本当にありがとうございます。

また、報恩供養では、師父の、頂相開眼のご法要をお勤めいただきました大乗寺山主東老師さま、本当にお忙しい中、ありがとうございました。この頂相は留学僧育英生でありまた書家、博士号をもつ胡先生がお描きくださっています。頂相の上部に賛といいましてそこの部分に添え書きがございますが、この賛は師匠を讃えてくださるお言葉です。一幅は光真寺の御前さまに、また一幅は東老師さまにいただきました。只今の法要を持ちまして美事完成の運びとなりました。東老師さまは金沢大乗寺の山主さまであられまして、本年は開山義介禅師さまの七百回御遠忌の最中に在り、本当にお忙しいお方でござ

います。善光寺では昨年、この名刹大乗寺に六十名を超える檀信徒の皆さまとお詣りさせていただきました。その節、手厚くお迎えいただき、檀信徒の皆さまも本当によい思い出になりましたことをこの場を借りて深くお礼申し上げます。

また、私ごとになりますが、この五月結婚の運びとなりましたが、その式師は東老師さまにお勤めいただくことになっています。お導きをよろしくお願いします。また、本日ご随喜いただきましたご寺院様方、そして役員、総代、檀信徒の皆さま、本当にお忙しい中、誠にありがとうございます。

この開山忌の位置づけは、師父が最も大切に、また、特別な思いで、勤めて参ったものです。といいますのも、師匠が善光寺開創以来申しておりました、『宗祖を通して釈尊に還る』の思想はこの開山忌が原点なんだ」と何度か私に語ったこともありました。

今年の九月からは育英会の募集を再開いたします。今後ともご指導賜りますよう、深くお願いいたしまして、本日のご挨拶とさせていただきます。

誠にありがとうございました。

〈連載〉

『普勧坐禅儀』に学ぶ　その三

駒沢女子大学教授　安藤嘉則

一

〈本文　書き下し文〉

然れども毫釐も差あれば、天地懸かに隔たり、違順纔に起れば、紛然として心を失す。

〈現代語訳〉

しかしながら、分別の心が起きて本来の仏心からわずかのズレが生じると、結局は天地の開きほどに大きく本来の仏心から遠ざかってしまうのです。また好きだとか嫌いだとか分け隔てる心が少しでも起こると、迷いに迷って本来の仏心を失ってしまうのです。

前号で『普勧坐禅儀』の冒頭の「道本円通、争でか修証を仮らん」以下の句を説明いたしました。すなわち仏道として示された真理は元来すべての人に円かに行きわたっているものであるから、そもそも修行とか証だとかいう必要もないのだ、ということでした。しかしそのように言われてみても日常生活を過ごしている私たちにとって、それはなかなか難しくて理解でき

ないのではないでしょうか。この迷い多き娑婆世界にいる我々とは関係のない世界のように思われるでしょう。

道元禅師もこうした問題を真摯に受け止めて参学されています。すなわち道元禅師は十代の頃、比叡山に学び、そこで「本来本法性、天然自性身」という教えに出会います。これは「道本円通」と同じ意味です。つまり我々は本来はもともと真実そのものであって、そのままで仏の身であるという意味ですが、これに対して道元禅師は「もしそうであるならば、坐禅など、仏教で実践されてきた修行そのものもいらないのではないか?」「さりとて修行しなければ迷いを重ねるばかりではないか?」そんな疑問を抱きます。この問題を抱えて比叡山から三井寺へ、続いて栄西禅師の開いた建仁寺へ、そしてとうとう中国へ渡り、天童山の如浄禅師に出逢い、曹洞宗の大法をいただいて帰国したのです。

さて今回解説する「然れども毫釐も差あれば、天地懸かに隔たり、違順纔に起れば、紛然として心を失す。」という『普勧坐禅儀』の言葉は、まず仏道の究極的なあり方を述べた上で、現実の迷える我々の有り様を示した言葉です。この「毫釐も差あれば（髪の毛一本ほどの差があるならば）」という語は、上述の「道本円通」なる理想的な境地に分別の心がほんのわずかに起こるならば、ということであり、その結果「天地懸かに隔たる」ことになるというのです。髪の毛ほどの差が天地ほど隔たるということはどういうことでしょうか。これは我々の心の本質的な課題であるといっても過言ではありません。

二

「心こそ心迷わす心なり　心に心　心許すな」という歌が古来歌われてきました。自分の迷える心が本来の心を迷わすのです。仏教の長い歴

史の中で常に心は重要な課題としてみなされてきました。

たとえば『般若心経』を読誦しますと、最初の方に「五蘊皆空」という経文が出てきます。この五蘊とは色（物質）・受（感受）・想（表象）・行（意志）・識（知識）というもので、仏教ではこの五つの構成要素からすべてのものが成り立っていると考えており、『般若心経』ではこの五つがすべて空（実体としては無い）とするのです。

現代の我々から見たら、これらの五つの構成要素を見て、なんて大雑把だろうかと思うかもしれません。現代人は高校の化学の授業で習ったように、水素H・酸素O・炭素C・カルシウムCa・鉄Fe・銀Ag・金Auといったような物質の基本単位としての原子が、この世の中の構成要素と考えるのではないでしょうか。

しかしこの五蘊説では、ただこれらの原子に相当する物質はただ色（rūpa）という言葉一つにまとめられ、他の四つは「こころ」の作用なのです。このように仏教の五蘊説において構成要素の大部分が心作用とすることは注目すべきことだと思います。この受（感受）・想（表象）・行（意志）・識（知識）の四つの蘊である心作用とはどういうことなのでしょうか。まず、「受」とは外界の対象を受用する心の働きです。たとえば花屋さんを通りかかったとき、多くの花々がただ見えている段階で、対象を受用することです。次の「想」は明確なイメージを持った分別作用ですので、たくさんの花々の中から「これは赤いバラの花だな」という明確なイメージをもった分別の心です。そして行（意志）はそのバラの花がとりわけ気に入ったので「欲しいな」、「買おうかな」、「いくらかな?」といったように対象に向かっていく心です。最後の識はこれらの心作用を統一する意識作用です。

このように心を重視した五蘊という枠組みは、

現代の我々には理解しがたい古い時代の考えと思われるかもしれません。しかし考えてみますと、この世界は私たちの心によって認識された世界であるともいえるのです。別言するならばこの世界は自分の心によって切り取られた世界であり、自分が今生きているからこそ存在し、この自分が自分の世界の主人公として自己を展開させている世界だということもできるのです。

常識的にいえば、「地球の中の日本という国の横浜市の港南区に住んでいる私」というような感覚が当たり前です。つまり私は世界を構成するごく微塵のような小さな存在であるという世界観が正しいのかもしれません。しかしたとえばマンションの一階下の部屋で夫婦げんかが起きていても、この私を「主人公」とするこの世界においては、それはなんの意味をもちません。自分の世界において、それは気づかない限り存在しないのです。（ちなみに「主人公」とは禅の大切な言葉で、それが一般的に使われるようになりました。）

先に花屋さんの花の事例を出しましたが、花に関心がないAさんは、花屋さんを通りかかっても「花屋さんにたくさん花があるな」というくらいでしょう。五蘊でいうなら受の段階です。しかしBさんはその中にすてきなバラの花を見つけます。それははっきりとバラを認識した段階（五蘊のうちの想）であり、さらにCさんは「どうしてもあのバラが欲しいな」とこだわる「行」の段階にあるといえましょう。Aさんの場合、赤いバラは確かに存在していてもAさんの世界には存在していませんし、Cさんのような場合、あの花はきれいだったなとバラが枯れてもいつまでも心に残るバラであることもあります。

さてこのように仏教は物よりも心に重点をもつ世界観を持っています。何年か前でしたが、

京都駅に仏教系大学の看板がありました。うろ覚えなのですが、そこには英語で「If your mind change, whole world change」（あなたの心が変われば全世界は変わる）というようなメッセージが書かれてありましたが、自らの心を変えていくことでこの世界を変えていく、そういう思想が仏教にあるのです。

三

さて『普勧坐禅儀』の文に戻りましょう。以上述べたように我々の心の作用には迷える分別心がすぐに発動しますから、ちらりとその分別心が起こって「毫釐の差」を生じ、それが天地遙かに隔たるほどの大きな迷いを生ずることになるのです。「毫釐の差」が「天地遙かに隔たる」ことになるということを敢えて譬えを用いて説明してみましょう。

まず親指と人差し指を合わせて、指と指の間を数ミリ空けます。そこに目を近づけて富士山を覗きますと、その数ミリの隙間に富士山がすっぽり入ってしまいます。この数ミリのわずかな隙間は、自分の心の中に生じた、わずかな分別心の窓といえましょう。私たちは自分にとって都合のいいもの、悪いもの、価値のあるもの、ないもの、きれいなもの、きたないものを相対的に分別して、その分別の心の窓から世界を見ているといってよいでしょう。そのわずかな分別心によって、ものごとに対する拒絶や受用、好き嫌いが生じ、それが天地ほどの差を生じることもありうるでしょう。

もちろん「分別のある人」と一般的に使われているように、分別すること自体、人間の精神活動ですから否定できませんし、分別することが全面的にいけないのではありません。自分自身のものさしや価値観をもって判断し分別することは大切ですし、それは我々は日常的に行っ

ています。ただ問題なのはその自分自身のものさしと思っているのが、実は自分のものさしではなくて、意外と借りてきたものさし（尺度）であったりするのです。ある場合それは学歴であったり、会社の肩書きであったり、財産であったりします。こういうものさしは目に見える尺度ですから、わかりやすいのですが、肩書きや財産で人間としての価値や幸せが決められるはずはありません。にもかかわらず現実の我々はこの借りてきたものさしに乗せて自分の幸せをはかっているのではないでしょうか。

以前ある方と初めて面会させていただいたとき、紹介してくださった方が「彼は初対面のときに必ず自分の出身大学を直接いわないでなんらかの形でほのめかすからみていてごらん」といわれました。案の定、大学名はおっしゃいませんでしたが、その一流大学出身であることを間接的に表現されました。学歴という目に見える尺度はわかりやすいですし、学歴を表明することで相手に対するメッセージとなると考えているのでしょう。

さて、続く「違順纔に起これば紛然として心を失す」というのも意味は同じです。「違」とは自らの心に違うという心で「嫌い」といった分別心、「順」とはその反対の「好き」といった分別の心ですが、このような自分の立場やご都合によって変化する妄分別の心によって、ものごとのありのままの姿が見えなくなることをいっていたのです。大嫌いな人の着ている洋服や持ち物、あるいはその人の考えなど、たとえそれが素晴らしいデザイナーの服や高価なアクセサリーであっても、素敵だとは思えませんし、それが大好きな人であれば、アバタもエクボで、三流品やニセブランドでも素敵に見えたりするものです。我々は意識するとしないとにかかわらず、心に色眼鏡を持っていて、見る対象に対

してゆがんで受け止めてしまうのではないでしょうか。

私たちは自分のものさしでものごとを分別や判断をするとどうしても対象を曲げてとらえてしまいますし、そもそも我々が見たり聞いたりする認識そのものは自分に関心のあることしか、情報が入ってきません。

道元禅師は『正法眼蔵』「現成公案」で「花は哀惜に散り、草は棄嫌におふるのみなり」とおっしゃっていますが、同じ植物でも桜の花は惜しまれて散り、雑草はいやがられて生えてくるというのは、我々の限定的な分別心をよく表しています。

さてこうした限定的な分別心を超えて本来の仏心を輝き出させるのは至難のことであることが『普勧坐禅儀』では次のように述べられています。

〈本文　書き下し文〉

直饒会に誇り悟に豊かにして、瞥地の智通を獲、道を得、心を明めて、衝天の志気を挙し、入頭の辺量に逍遥すと雖も、幾ど出身の活路を虧闕す。

〈現代語訳〉

たとえ仏法を会得したと誇り、悟りの経験もたっぷりで、ちらっと真実を垣間見、道を得て本来の心を明らかにし、天を衝くばかりの意気込み示して、悟りの入り口のあたりに逍遥するほどの人であっても、まだ本当の活き活きとした禅の道筋を欠いているのである。

このようにある程度悟りの体験がある人でさえ、「道本円通いかでか修証を假らん」の世界、つまり修行や悟りも必要としない本来の仏心のあり方には行き着きません。そして我々のもつ分別の心を停止してしまうことは前述のように

大変困難なことです。『普勧坐禅儀』には続いて次のように述べています。

〈原文〉

矧んや彼の祇園の生知たる、端坐六年の蹤跡見つ可し。少林の心印を伝うる、面壁九歳の声名尚聞こゆ。古聖既に然り。今人盍ぞ弁ぜざる。

〈現代語訳〉

祇園精舎におられ、生まれながら智者であった釈尊でさえも、成道に至るまで六年も端坐して修行されたことをみるべきです。少林寺にあって正伝の仏法を伝えた達磨大師が、九年面壁修行された故事も伝えられています。古えの聖者（釈尊や達磨）もこのように修行なさったのであるから、まして今の人たちはなおさら努力しないでおられましょうか。

この『普勧坐禅儀』の一文では、自分のものさしにはかってえり好みしたり、分け隔てする限定的な分別心にとらわれてしまう我々の心をどう修めていくかという課題に対し、釈尊・達磨大師でさえ六年あるいは九年もの間、坐禅修行なさったことの意味を改めて喚起していたのです。そこで次号よりこの坐禅について解説していきたいと思います。

善光寺のご縁に因み壇信徒で参詣

10月21・22日　長野・善光寺へバスツアー

長野善光寺を参拝

皆さんもご存知のように善光寺という名前のお寺はこの横浜日野の善光寺のほかにも、宗派を超えて日本中に数多くあります。その中でもより多くの人々に知られている長野善光寺が平成五年に調査した結果、全国には四百四十三体の善光寺仏があり、私共と同じように「善光寺」を正式な寺名とする寺院は百十九を数えます。そんなご縁のもとに平成五年十一月、「第一回善光寺サミット」が開催され、善光寺如来の仏徳を後世に伝え、世界平和に寄与することを目的とした有志の集いとして、「全国善光寺会」が設立されました。そして、私共横浜・善光寺もこの目的に賛同して「全国善光寺会」に参加しております。

平成の大改修を終えた長野の善光寺は今年「善光寺イヤー」と銘打ち、約四十年にわたって中断されていた山門二階への登楼参拝を再開するなど、特別な年にふさわしい催しを行っています。

大勧進での法話と本堂でのお経

十月二十一日、横浜善光寺の壇信徒一行はこ

の特別な年に因んで長野・善光寺に一泊二日の参詣旅行に出かけました。今回の旅行は参加者も多く、バス二台に分乗。朝七時に横浜を出発したバスは昼前に長野・善光寺に到着しました。

善光寺では宿坊の一つ常智院で昼食をとった後、特別に山内寺院である大勧進で法話をいただき、本堂内陣でのお経のあと、本堂の祭壇下の真っ暗な通路をめぐる「お戒檀めぐり」に進みました。続いて自由行動の時間では山門の特別参拝に行ったり、参道のお店でお土産を買ったり、善光寺での限られた時間をギリギリまで楽しみました。

横浜善光寺の源流興国寺で先祖代々の供養

今回の旅行にはもう一つの目的がありました。それは横浜善光寺開山白純大和尚の奥様、博志住職の祖母にあたる黒田嘉さんの実家、須坂市

長野・善光寺

の興国寺で先祖代々の供養を行うことにありました。善光寺から約三十分ほどの行程で興国寺に到着。博志住職は、まず、住職の水野孝道老師にあいさつを述べ、歴代住職を祀る墓所にてお勤めいたしました。横浜善光寺の源流の一端ともいえるこの場所で、壇信徒一行もお詣りをしました。

このあと一行は大町温泉郷で一泊し、翌二十一日は松本市の開智学校や国宝松本城などを見学しながら、ゆったりと帰路につきました。

住職の水野孝道老師とあいさつをされる倫子先代方丈夫人

興国寺山門にて

興国寺31世玄慶朴翁大和尚墓前供養

皆さまと共に

国宝松本城にて

特集

山形県鶴岡市 龍澤山善寶寺

大圓大和尚は博志住職と檀信徒の皆さんになにを伝えたかったのでしょうか。生前、善光寺の次代を託す博志住職とともに、これからの善光寺が学ぶべき寺院のいくつかを訪ねることになりました。その一つが38号でご紹介した金沢の大乗寺であり、今回ご紹介する龍澤山善寶寺です。大圓大和尚亡き後、大圓大和尚の足跡やその信念と理念の拠り所をたどって、これからの善光寺に欠くべからざるものを探し、そして、学ばなければなりません。

博志住職は、再開する善光寺留学僧育英会の

相談役をお願いするために、善寶寺を訪問するに先だって、大本山總持寺に斉藤信義善寶寺山主を訪ねごあいさつに伺いました。斉藤老師は、大本山總持寺副貫首であり、多忙な毎日を送られていますが、博志住職のお願いに応えて、「善光寺育英会は仏教の国際交流という目的からも、価値と意義があるものです。喜んで引き受けます」と快諾をいただきました。

善寶寺に参詣して、善光寺の壇信徒の皆さまにも、龍神様の感得をの願いをもって、博志住職は、檀家総代東郷敏氏とともに、七月、山形・庄内平野の中央に位置する求法と実践の祈祷寺、善寶寺を再び訪ねました。善寶寺は大圓大和尚の大学時代の同窓生で同窓会「三心会」の重鎮鶴岡市保春寺住職、大八木春邦老師が寺務を務められているという由縁もありました。庄内空港にお出迎えいただいた大八木老師との再会から始まります。

龍神様を祀った東北の古刹

龍澤山善寶寺は山形県庄内地方の城下町藤沢周平の郷里でもある鶴岡市の北西にあります。ご本尊は薬師如来。水の神である龍神様をお祀りしており、海の守護神として、東日本各地の遠洋、近海漁業関係者や海運関係者の厚い信仰が続いています。

平安時代の頃に「法華験記」や「今昔物語」

にも登場する妙達上人という高僧が天歴九年（九五五年）頃、この地にわたり、草庵を結び、「龍華寺」という名を付けたことが始まりと伝えられています。龍神様との因縁もこの妙達上人の時代にまで遡るといわれています。ある時、上人のもとに龍が現れ、『法華経』の功徳を受けたいと願ったといいます。その龍は妙達上人の『法華経』の読誦を聞き、願いが叶い、妙達山の麓にある「貝喰みの池」に身を隠し、龍神様となりました。

北廻り航路の整備とともに広がる信徒

延慶二年（一三〇九年）、大本山總持寺二祖でこの善寶寺の開祖である峨山紹碩禅師が藤原氏の請を受け、この地で巡錫しました。峨山禅師が妙達上人の坐禅石で坐禅をしているとそこにも龍神様が現れたといいます。禅師が「三帰戒」を授けると貝喰の池に消えていきました。

さらに室町時代に至り、峨山禅師七世の法孫太年浄椿(たいねんじょうちん)禅師がこの地に伽藍を整備し、山号を龍澤山、寺号を善寳寺と改めています。やがてこの受戒会にまたしても龍神様が現れ、戒脈伝授を願い出ましたところ、たちどころに願い叶い、太年禅師は龍王殿を建立、さらに奥の院の貝喰の池には龍神殿を建立、龍神様をお祀りになったという謂われです。

この龍神様と漁業は遠い遠い昔より深い信仰で結ばれ、人々は龍神様を通して、心の安心を求め、あるいは危険を未然に防ぎ、万人和合の根源を求めるなど、人々の生活の中にしっかりと生かされています。龍神様の信仰は北廻り航路の発展とともに北は松前から西は北陸地方そして遠く九州まで広がり、一年を通じ全国より参詣する人は多く、その賑わいと信仰を厚くしています。

歴代住職は寺門の興隆に尽力し、江戸時代中

期、第二十世霊感応伝大和尚の代には本堂庫裡などの整備が進み、今日の基礎が築かれました。また、天明六年（一七八六年）第二十六世大雲祥嶽大和尚の時代には、信者も広範囲に広がり、龍神様の話は関西方面にも伝わってご祈祷・祈願のご利益はあまりにも有名です。かつて、土砂の流れが止まらずに難航していた泉州堺港の工事のため、戎嶋慈眼院で善寳寺の住職による土砂退散の祈祷がなされ、満願の日に経文を記した小石を埋没したところ不思議にも深くなり船舶を導き入れ容易に入港できるようになったと記されています。また、この年の十二月には有栖川宮家より館入りが許され、宮家のご祈願所にも定められました。

明治時代に入り、第三十三世月円禅山大和尚の代には、漁業関係者の発願による我が国唯一の「魚鱗一切の供養」の五重塔が建立され寺門の形が荘厳に整いました。

いまなお多くの人々の信仰を支えて

善寳寺は背後に龍沢山、山門から数百年の大巨木、美しい杉林を背にそびえる五重塔。木立に囲まれた石敷の先の総門は安政二年（一八五五年）に建てられたもの。この総門をくぐると仁王像の待つ文久二年（一八六二年）に建立された山門があります。その右手には五百羅漢堂

と観音殿、左手には高さ三十八・四メートルの五重塔がそびえます。総檜づくりの塔には龍神伝説を伝える彫刻が施されています。

ここから九十六段の階段を上がった先には昭和三十五年（一九六〇年）に建立された現在の本堂、感応殿が広がります。青森のヒバで建てられた感応殿。感応殿に続く僧堂。善寳寺は明治三十三年（一九〇〇年）に専門僧堂となり、

道元禅師が自ら実践した、求道と修行の教えを今に受け継ぐ善寳寺。それまで多くの名僧・高僧を輩出しております。

龍神様が身を隠したといわれている貝喰みの池は感応殿に隣接する信徒会館に沿い、近代的バリアフリー化された参道をおよそ十五分ほど歩いたところにあります。この貝喰みの池はかつて「人面魚」の棲息でテレビや雑誌を賑わせ大きな話題となった有名な池です。いまも「人面魚」が一杯です。

また、地域の信仰の中心として年間にわたる行事も盛んです。その中でも立春の日に行われるお水取り（水を汲み、本堂に納める儀式）は厳寒のなか、神秘的で霊験あらたかな行事です。貝喰みの池の横に建つ龍神堂の裏の沢より、山主老師、それからご参集の人々により汲み集められた「お水」は、貝喰みの池から善寳寺正面総門に運ばれ、山門、階段を通って本堂前まで

すすみます。例年、参道は雪に覆われることが多く、厳しい寒さの中、「お水」はやがて須弥壇へと運ばれ、龍王殿に安置されます。

また四月には稚児行列が繰り出される「龍王講春大祭」、放光堂に安置されている平和観音大祭（八月）、妙達山での供養法要が行われる秋大祭、妙達上人開基祭（十月）など、檀信徒の皆さんや地域の人々にとって大切な数々の行事がとり行われます。善寶寺は、いまなお日本有数の大祈祷道場として龍神様の霊験あらたかに、多くの人々の信仰を受けています。西は琴平金刀比羅さま、北の善宝龍神さまといわれる由以です。

善光寺は来年の六月頃、ご利益の厚い善寶寺を檀信徒の皆さんと訪ねることになっています。どうぞ、奮ってご参加ください。

秋季彼岸法会

九月二十二日、善光寺では午前、午後の二回にわたって、恒例の秋季彼岸法会が執り行われました。ちょうど秋のお彼岸に、日野公園墓地へのお詣りも多い中、善光寺にも多くの檀信徒の皆さまがお運びいただきました。

小田原成願寺山口晴通老師にご法話をいただきました。ご法話のテーマは「卒塔婆」について。日頃、お彼岸と言えば当たり前のように感じる「卒塔婆」も、その成り立ちをお聞きすると、改めて崇高な気持ちでお詣りすることができます。

ご法話に続いて、博志住職の導師による法要

に移ります。厳かな読経の中に連れられて、祖先や亡き人に向かう人々の心。まさに、此岸と彼岸が結ばれる瞬間です。参拝者一人ひとりの焼香をもって、無事に法要を終えることができました。

秋彼岸法要法話

小田原　成願寺住職　山口晴通老師

皆さんこんにちは。今日のお天気は、雨が降るやら不安定のなかを、ご参詣いただきご苦労さまです。

本来ならば、ご案内のごとく、本日は新潟県の方丈様がお話をなさる予定でありましたが、ご都合でおでになることが出来なくなり、急遽、私がピンチヒッターとしてお話をすることになりました。

常日頃、よくお知り合いの皆様の前でお話をするということは、半分いいような、反面どうもやりづらいような気持ちですが、その分、皆様にはお気軽にお聞きいただければいいと思います。

道元禅師様が中国へ参りました時に、二十五歳から三十歳の間ですね。こういう言葉を残しておられるんですよ。「孤舟（こしゅう）共に渡るすら」。何年か前に先代方丈様と檀家の皆様とご一緒に中国にまいりましたね。道元禅師様がご修行になった天童寺。ここへお参りさせていただいたのですが、ご承知のように蘇州とか、寧波とか、江

南地方ですね。江南地方は水路が縦横無尽にあるんですね。現在では交通量のためになるべく水路を塞いでいっている方針らしいですけれども、私どもの参りました時代は水路が縦横無尽にありました。そこで大きい舟、小さい舟が交通手段として使われているわけですね。

七百年前の道元禅師様の時代にはなおさらのことだと思うのですけれども、その小舟でこちらの岸からあちらの岸まで渡る。わずか数分間であるかと思いますが、それでもう渡ってしまえば、同じ舟の中にいた人とは一生会うことがないであろう。ですけれども、とにかく小舟に何人か乗り合わせたということは、「なお前世の宿縁あり」と言っているんですよね。現在偶然に一緒になったんじゃないと。前の世からのずっと積み重なった縁がそこで結ばれて、ひとつの舟に乗り合わすことができたんだと。だからお互いにこの尊いご縁というものを尊重しなければいけないんだよと。帰国後、若いお坊さん達に、ご自分の体験を通してお教えになっていらっしゃるわけですよね。

そういたしますと今日、善光寺様のおかげで、私たちはこの善光寺の釈迦殿に、一つのお部屋で集まって、こうしてお目にかかれるということは、それこそもう前世以上の宿縁だと思っておりますね。そういう意味で私は今日のご縁をいただいたことは本当にありがたいことだと思います。そこでここに「釈迦牟尼仏」と書いてあります。

お釈迦様のことになるんですけれども、どうも普通の方はお釈迦様というと、もう悟りきった、悟り済まされた方で、そしてお釈迦様というと、皆さんは別といたしまして、一般にはどちらかというと、葬儀とかご法要とか、そこの奥に鎮座ましましている、ちょっと近寄り難いというイメージの方が多いのではないかと思い

ます。

お釈迦様だって最初から年寄りで生まれてきたわけではないんですよね。「釈迦」というのは固有名詞ではないんです。普通名詞なんです。「釈迦族」という部族の名前です。よくお釈迦様はインドの方とおっしゃいますけれど、活躍されたのは今のインドですが、お生まれになったのは今のネパールの方です。ですからインドの種族の方とは明らかに違う。

今、あちらに参りますとネパールとインドの国境があります。国境といっても鉄道の遮断機のようなものがひとつあるだけ。でもそこで出国手続、入国手続はやらなければいけない。で、その遮断機を通ってネパールに入りました。そうするとルンビニーという場所があって、そこでお生まれになったわけです。

お釈迦様は幼名をゴータマシッダルタ。小さい国とはいえ、れっきとした王子様です。ただしお母さんには恵まれなかった。お母様がカピラ城というお城で身籠られまして、日本でもそうでしょうし、その当時の風習としましてお産をされるには実家に帰るわけですね。で、お城を出て実家に帰られる、その途中で産気づいて、ルンビニーというところでお生まれになったわけですよね。ところがお母様は産後の肥立ちがよくなかったとみえて、一週間でお亡くなりになられて。その後はお釈迦様はお母様の妹ですから、叔母さんですか、叔母さんに育てられた。そういうわけで幼名は「ゴータマシッダルタ」ということで。

お母様は亡くされましたけれども、小さいながら一国の太子ですから何不自由なく過ごされたわけですね。やがて、二十五歳の時ともいうし、三十歳の時ともいう、いろいろな説もありますけれども、とにかくあることに感じて、そのお城を出て、いわゆる出家をなさったわけで

すね。

後世、釈迦族の中でもっとも尊い方、これを牟尼というんですよ。私たちが釈迦牟尼仏といっている、その牟尼の意味は釈迦族の中で最も尊い方という意味なんです。お釈迦様は、やがてブッタガヤでお悟りを開かれました。そこでお悟りを開かれたので「仏陀」と。インドの言葉でブッタと言っているわけです。この中の、私たちは「仏」という字だけを取り出して言っているわけなんですよ。この理論おわかりでしょうか？

先般ネパールへ行きましたら「ブッダエアライン」という飛行機がありました。ルンビニーに飛行場をつくりたいというのは仏教徒の長年の願いだったんですね。以前、私たちは飛行場がルンビニーになかったものですから、北インドから国境を越えてネパールに入ったんです。今は飛行場ができて、カトマンズから逆に小さい飛行機でしたよ。プロペラの小さい飛行機でしたが、ブッダ航空でルンビニーまで行けるようになっているらしいですね。私も今回ネパールへ行ってカトマンズの空港で初めて発見したことなんですけどね。そういうわけで今でもブッダエアラインとして名前が使われています。

このようにお釈迦様のお名前の由来をお話ししたんですが、やがてインド、特にベナレス、ガンジス川のほとりですね。ベナレスはその当時から商業都市として非常に発達した街なんですね。そこでまずお釈迦様が第一声を挙げられて、ベナレスを中心にして布教をされたわけなんです。

やがて人間ですから歳はとる。お互い公平にとっていきますね。八十歳になられた時に、お釈迦様もやはり北のふるさとが恋しくなられたのでしょうね。やがてお弟子さんを連れて、北インドから今のネパールの国境を越えて、ご自分のふるさとのカピラ城へお帰りになろうとな

された。ところがネパールの国境に入りましてしばらく行った、クシナガラというところでとうとうご発病になってお休みになられたわけですよね。

最後に「あなた方はこういうふうにして生きていきなさいよ」と。「私の肉体は滅びるけれども、これからは私が今まで教えを説いてきた、その教えを心のともしびとして生きていきなさいよ」と言ってお経を示されて。お経っていうのは亡くなった人にあげているわけではないんですね、最初はね。あくまでも生きている人に「こういう心持ちで生きていきなさいよ」とお教えをなさって。

そして、最後にお弟子のアナン様に「アナンよ、私はお水が飲みたい」とおっしゃった。それでアナン様が急いでお水を汲みに行かれた。ところが、その直前に何十頭かの牛が川を渡ったために水が濁ってしまって飲めない。で、川の水が澄むのを待ってお水を汲んでいった。ところがもうお釈迦様はその時には息絶えておられた。で、お口にお水を浸してさしあげた。いわゆる末期の水。末期の水というのはこういうところからもきているわけですよね。

さぁ、ここでお釈迦様がお亡くなりになりました。そうするとどういうことが起こったかといいますと、ぜひお釈迦様のご霊骨を私共でお祀りしたい、という念願が起こったわけですね。で、八つの国から代表が来て「ぜひ私の国に欲しい」ということで争いになりそうになりましたので、ある長老の方が「それではお釈迦様を火葬にふしてご霊骨を八つに分骨しましょう」ということで、八つに分けたわけなんです。

本日、善光寺の方丈様から「お塔婆について何かお話をしてくれないか」というご要求がございましたので申し上げますが、ここからが今日の本題になるかもしれません。立派な方がお

亡くなりになった時に、そのご遺体をお埋めして、その上に塔を建てるということは、お釈迦様以前からすでにあったインドの習慣なんですね。ですからお釈迦様もそういうわけで八つに分けられましたから、当然それぞれの部族の方がお持ち帰りになって、そしてご霊骨を納めてその上に塔をお建てして、それからは文字通りお釈迦様をお慕いしてご供養申し上げたわけですよね。

お釈迦様が亡くなられて二百年経ちますとアショカ王という人がインド全土を統一しました。そうすると各地に、この塔を盛んに建てたんですね。まぁ伝説によれば八万四千箇所建てたと。これは数が多く建てられたということだと思うんですけれども、そう言われるほどたくさんの塔を建てて、お釈迦様をご供養申し上げたわけなんですね。そのうちの一本は現在でもベナレス郊外のサルナートの博物館に残っております。私も何年か前に拝見してきましたけれども、石でできていまして、さすがに上の方は折れてしまって、その残部が残っております。でも、その石の周りに、古代インドの言葉でずっとお釈迦様のことが書いてありますから、これは間違いなくアショカ王がお釈迦様没後二百年の後に建てたということがわかっております。

インドではこういうふうに石で塔を建ててお祀り申し上げました。こういったことから仏舎利信仰が非常に発達してきたんです。

何年か前に先代方丈様と一緒にスリランカに参りました。この中にも、ご一緒した方がいらっしゃるんですけれども、お釈迦様の歯をお祀りしたお寺ということで、仏歯寺にお詣りもさせていただきました。

仏教は南方スリランカ、タイランド、ミャンマーの方へ行ったグループと同時に、今度は北のシルクロードを通って中国へ参りました。そ

ういたしますと、中国でもお釈迦様の本当の舎利かどうかわかりませんけれども、とにかくお釈迦様のご分骨の一部を頂戴したということで、盛んに塔が建てられました。皆さんがいちばん馴染みの深いのは西安の大雁塔でしょう。これは唐の三代皇帝高宗が、亡きお母様のために建てたお寺で大慈恩寺、そこにあるのがよくテレビで出ます大雁塔ですね。あれが千二百年前に建てられた時には西安の人達、当時は長安なんですが、人々は驚いたでしょうね。今でこそ高層建築があって、その中のひとつですからそうも思いませんけれども、あの時分は、高層建築といえば、あの大雁塔の他はなかったのですからね。みんな驚いたと思いますよね。そこでお祀りをした。

そんなわけで中国に行きますとあちこちで塔は見かけますね。たとえば仏教が初めて白い馬の二頭に、お経を乗せて中国へやってきたというので、洛陽の郊外に「白馬寺」というお寺がございます。そこの郊外に「白雲塔」という塔が立っています。それからもっと皆さん馴染みが深いのは嵩山の少林寺でしょう。達磨さんのいらっしゃった少林寺、嵩山。そこには中国で最も古いと言われている嵩岳塔というのが立っております。ただしこれはさすがに今にも崩れそうで中には入れません。今、少林寺といいますと少林寺拳法、あちらの方で有名ですね。達磨さんが本来九年間、あそこでご修行されたんですけれどもね。今はどちらかというと少林寺拳法。中国の人は少林寺拳法を習ってお巡りさんなどの職業に就きたがるらしいですね。少林寺拳法を身につけていると就職率がいいんだそうですよ。

二、三年前、善光寺様、東郷先生のお供をしてドイツへ参りました時に、私はミュンヘンでお土産屋さんに行ったんですよ。そしたら私が

作務衣を着ていたからでしょう、「どこの国の人だ？」と店員さんが聞くものですから「日本から来たんだ」と。「日本から来たんなら空手やなんかやるのか？」と聞くから「やるさぁ」と答えて「ヤァー」と言ったら飛び退きましたよ。本当は何も知らないんですけれども。それくらい少林寺拳法、空手というものはヨーロッパの方にも知られているんですね。

そんなわけで中国では材料は石でなくて、「磚（せん）」と言って黄土を練り固めた、日本の煉瓦の様な感じですよね。それをずっと積み上げて塔の材料にしていますね。現在でも造られているんですよ。有名な蘇州の寒山寺。私が三十年ぐらい前に参りました時は塔が無かったのですが、四、五年前には立派な塔が立っていましたよ。ですから今でも中国では塔が建てられているわけですよね。

これがやがて日本に来ました。日本では聖徳太子の時代。そうすると法隆寺、薬師寺の東塔と西塔をはじめ、やはりこれも仏舎利信仰のひとつなんですね。日本でも埼玉県に慈恩塔が建てられましたね。これは「西遊記」で有名な玄奘三蔵のご霊骨の上に建てられた塔の名前です。お釈迦様あるいは玄奘三蔵、そういった高僧方の舎利というご霊骨の一部を頂戴して、それぞれの塔が建てられているわけですね。日本へ来ますと、まず木造ですよね。こうして日本に塔婆の信仰が導入されました。

これがやがて鎌倉、室町時代になりますと五輪塔ということで定着するんですね。これは皆さんもご承知でしょう。五輪塔と言いましてここから上、空風火水地となるんですね。五つの切り込みがあって形があるでしょう。これで五つの輪で五輪というわけですね、鎌倉から室町になりますと。もちろん江戸時代でもこういう塔がありますね。今、東京の伝通院に参ります

と、家康のお母様の於大の方の墓、千姫の墓、家康の側室の墓、みんな大きな五輪塔のお墓ですね。こういうふうに正真正銘のご霊骨を下に埋葬して、その上に大きな五輪塔を建てて、お詣りしたのです。

やがて今度は現在のような墓石になります。一人ひとりがこんな立派な五輪塔を建てるわけにはいきません。今のようなお墓の墓石、あれが定着いたしますと必然的にこの五輪塔の名残として下をこういうふうに長くして、木製でもってお塔婆をつくって、そして私たちはお詣りしているわけですよ。

こんなわけでお塔婆の歴史というのは、これはもう極端にいえばお釈迦様の以前からあったこと。しかもお釈迦様からは私たち仏教徒としては当然のこととして毎日お詣りしているわけです。ですから皆さんがそれぞれご自分の想いの方をお塔婆に心を込めてご供養いただいて、それをお持ちいただいてそれぞれのお墓にお建てになるということ。そういうことによってご自分と亡くなられた方とが一体になっているわけですよね。本当に一体になっている。前世の宿縁どころでない、前世・今世・来世、これ「三世」といいますね。ありがたい、そういった意味合いでもって、今の私たちはお塔婆というものを大切に扱っているわけでございます。ですから学問的にはいろいろな説もございますでしょうけれども、とにかく私たちはお釈迦様の時にさかのぼって、お塔婆に対する信仰というものがあるんですから、これからも大切にお詣りし、また守っていきたいと思っております。まだ、いろいろ話したいこともございますけれども、この後に大切なご法要が控えておりますので、またの機会がありましたら、お話しさせていただくことにして、本日はここまでにいたしておきます。どうもありがとうございました。

博志住職のアメリカ随想

カリフォルニア大学バークレー校
日本研究センター五十周年記念大会に参加して

善光寺住職　黒田　博志

師資縁あって、カリフォルニア大学バークレー校、日本研究センター（CJS）ダンカン・ウィリアム所長のご案内とご招待を受け、去る、平成二十年五月十七日に行われた創立五十周年記念大会に参加する機会に恵まれました。私ごとき未熟者が参加できる大会ではないと思いましたが、私の師父、大圓武志大和尚の余光をいただき、大きな区切りの中に遭遇になります。稀の偶然ではないと思い、この由緒あるセンターの大会に坐して考えましたことは、よき師、よき友とのめぐり合いによって『自分という存在が、いま支えられ生かされている』という実感を、心底痛感させられたことです。

私を導いてくれたダンカン隆賢ウィリアム氏は、ハーバード大学在学中、日本仏教史の博士課程に籍を置き、ひたすら仏教に傾倒された方です。

左から、ダンカン・ウィリアム氏、仏教伝導会沼田智秀会長、筆者

善光寺との出会いは、一九九八年四月に日本滞在中、横浜善光寺留学僧育英会に留学僧認承のための論文を提出された事が縁となりました。その論文のテーマは近世曹洞宗史、曹洞宗本末帳の分析、檀家寺と葬儀、祈祷寺と現世利益、僧堂と雲水修行と多岐に亘りました。

さらに研究課題を人間と人生の多様性に踏み込み、自身のアイデンティティーの確立を見い出しながら、日本の仏教に学び、行じ、特に道元禅と曹洞宗に捉われ深く熱く探究する。さらにはハーバード大学での研究も相合わせながら単に仏教という枠に捉われることなく、限りなく多方面にわたるべきと思考し、曹洞宗の歴史的実態に鑑みて哲学、歴史、心理学、儀礼論に限定されてはいけない、多角的に積極的に働くべきだと考え、国や宗教の境界線を自由に越え活動するという世界観をもつことこそ、二十一世紀の役割だとの信念をもっていらっしゃいま

す。

この気概に師父も共感、触発され、留学僧第十四回生として承認されるという経緯があり、以来、師父とダンカン氏は、仏教と世界観についての、これから進むべき方向性を共有してこられたと聞いております。

この五十周年大会は単に歩いて来た足跡を振り返るのではなく、いま立っている処を確認し、これから行くべき道を画策しているように感じられました。

記念パーティーには曹洞宗北米総監秋葉玄吾老師、仏教伝道協会沼田智秀会長、ほか内外関係、著名人約三百人が列席、大変盛大な式典でした。その中でダンカン氏は次のように語られました。

『二十世紀、日本は未曾有の戦乱を経て平和国家をめざし、経済立国として世界の頂点に立つまで繁栄した。しかしながら、なにか大事なものを見失ったように見える。アメリカもまた世界の大国として、繁栄しつつも数多くの問題点を抱えている。二十一世紀は信仰心と文化の世紀となります。アメリカには真の日本が伝わっていないように思う。私は仏教を通して古来から伝わる日本の大事な文化をアメリカに紹介し、また、アメリカの社会でそれがさらに溶け合い新しい文化が形成できるのではないかと考えます。

その思想の中心として仏教の教えが世の中を変えていくと信じています。このセンターの五十年の長きにわたる活動。そしてさらに両国の懸け橋となるべく続けられる活動に思いを巡らせます。』と。

日本人でさえ忘れかけている古き良き日本。日本人が大切に育んできたそのこころを思うとき、故きを温ねて新しきを知るという言葉が頭

をよぎります。このことは、仏教でしか実現しえないと思います。世界の平和、民族、宗教の融和など現実に直面し苦悩している。また世界の様々な境界、摩擦等、そしていま、最大の課題、地球温暖化環境問題にしても、世界各国は、自己のみの利権に固執するため、的確な解答が見出せないでいる状態。この様な複雑多岐な障壁を乗り越える力は、仏教にしかないと語るダンカン氏のこの大会に懸ける意気込みを全身に受け、気迫に圧倒される思いでした。氏は英国系二世、キリスト教社会と日本という仏教社会の両方を経験しているだけに非常に説得力があり、私自身大きな感動を覚え、氏に引き込まれてしまいました。

私はこの大会に参加しこれまで数多くの先輩や老僧の方々が身を以って行じてくださったものが、いまそこに光り輝いており、仏の道を洋々と眺めながら、旅を結ぶことができました。

不動三尊像（向かって左より、制多迦童子、身代り不動明王、矜羯羅童子）

特集

不動明王大祭

大圓武志大和尚の遺志を受け継いで

成寿山善光寺は開山以来、釈迦牟尼仏を本尊とし身代わり不動明王をお祀りしております。不動殿に安置されている仏さま、大日如来、阿弥陀如来、薬師如来のお前立ちとしてお祀りされている不動明王は、一見恐ろしい姿をしていますが、その心は衆生を救済しようとする厳しくも優しい慈悲に満ちた仏さまのお心なのです。

恒例となっております毎月二十八日の写経会に因み、今年は五月二十八日に、不動

明王大祭が厳修されました。この不動明王大祭は、大圓大和尚が育英会を発足する際始められた行事です。諸般の事情により近年は内献で勤められておりましたが、今年は育英会の再開に当たり、久々に執り行いました。法要の前には檀家総代、東郷敏様に「論語」についての講演をお願いしました。

東郷様の講演と法要。論語と仏法。二つの「道」の大きな流れを学び、感じながら、有意義な時間を過ごすことができました。

転読大般若法会

不動明王大祭後の写経会

不動明王大祭　特別講演

おもいやりの心

見ても聞いても読んでもわからない

東郷　敏

ご紹介をいただきました東郷でございます。昭和三十九年七月大本山総持寺参禅会にて先代大圓武志和尚さまに運命ともいえる出会いをいただき、以来、ずっと善光寺で教えをいただいております。

先程倫子奥様に「大圓様とのご婚礼いつでしたか？」と、「昭和四十四年でしたから、四十年になります」。方丈様遷化されて、今年は丸四年目「お淋しいですね」「いいえ方丈は私の中に在りますから」。まあなんと!!　「いまここ」に席をいただいている私。また、ご上山の皆さま。このことがもうたいそうなご利益でありまして、論語の中に「仁（じん）に里（お）るを美（び）となす」とあります。先般、ＮＨＫテレビで永平寺門前にある永平寺町立中学校の紹介がございました。ご覧になった方もおありと思います。その正面玄関、タタ

ミ一畳ほどの大きな額「里仁為美」と揚げてあります。曹洞宗大本山の門前だから面白いのです。これは孔子の言葉です。いまここ。この素晴らしい環境に里ることが仁であり、美だと教えているのです。

博志住職から今日の不動明王大祭に「ぜひ論語を話してくれませんか」と言われるので従っています。非常に浅い知識ではありますけれども、総代役員、檀信徒をはじめ、並み居る僧侶、高僧方、また各界学者の方々を前にして、果たして私の論語でいいのか、少し浮足立っています。司会より紹介ありました、善光寺開基、村岡満義社長より勉強させていただいた私と論語です。この社長大層な儒学者、東京湯島天神の聖堂に都度招かれ、ご皇室のご命名者が集う日本儒学会に民間より唯一参加が許されていました。また十年間も全国ネットのラジオ放送でご本人が直に論語解釈をやっていたこともあり、

元台北大学々長、孔子直系第七十七代、孔徳成先生ともごじっこんで親交厚く、会社の研修所に直筆「成寿殿」の大額があるほどです。事業にも論語の教えを取り入れ、会社を経営。

「社会貢献・人材育成」

すべては「社会貢献・人材育成」にと、自ら苦労して結果を人に分かつ、徹して無私のお方でした。大圓和尚然り。善光寺の「留学僧育英

会」もその延長線上にあります。まったく信仰の乏しい私ですが、出会って以来、論語ゆえに、大圓和尚とは方向を幅広く共有、共感できました。片や仏教、片や論語ということで非常に葛藤した経緯がございます。

そんなこんなで私がお話しさせていただくのは私が述べて尽すわけではなく、二千五百年前の中国で生まれた孔子という方のお話、その受け売りです。論語という言葉を初めてお聞きになった方いらっしゃいますか？　あっ、いらっしゃる。孔子というお名前を初めてお聞きになった方は？　ある。ありました。大概「子（し）」のつく文字は女性に倫子、素子、順子などなど。以前は七〇％以上つけられています。十干十二支、干支の始まり、これも子です。今年はちょうど「子」の年。縁起がいいです。孔子、孟子、曽子、有子、顔子等々、聖徳太子。やはり、音でも訓でも「し」は、精神の原点になっています。従って、女性は生命（いのち）の源。男性がいくら力んでも女性にはかないません。瑩山禅師というお方、大層女性を尊んだとあります。ご承知の上でおそらく根源を大切になされたのではと思います。

ことしは年賀状に子子の子子子子と書いてお出ししました。ほとんど通じなかったみたいです。何と読むかといったら「猫の子、小猫。鼠の子、子鼠」そういうふうに読める。余談ですけれども、今日は「子」のついた第一人者のお話。

孔子生誕の背景

孔子やお釈迦様がお生まれになったのは紀元前四五〇～五五〇年頃とか。生誕には諸説があり、ほんとは定かでない。しかし、このお二方、奇蹟的に国を変え、ほぼ同時代なのです。日本の皇紀神武天皇はわずか百年前、のち三百年の間に哲人ソクラテス・プラトン・アリストテレ

ス・アルキメデスそして西暦〇年にキリスト。実に神・宗教家・哲学者が集中している不思議。イスラムのマホメットは少し後、日本の飛鳥時代に近いです。仏教の鎌倉はさらに六百年後です。何千、何万年という人間の歴史の中でそこに人間の精神的発達の起点・原点というものが集約されているように思います。

今、論語と仏教の背景を先に説明したほうがわかりやすいかなと思って話させていただきましたが、いささか時間的に若干の誤差があるやもしれません。歴史家の方々、どうぞ教えてくださいませ。

孔子が生まれた頃、中国は春秋乱世期。もう毎日毎日どうしようもない世の中。孔子が目にしたのは人間の不幸ばかり。政治も社会も制度も人も信用できない。なんだか、嘘ばかりついているように見える。孔子もそこを嘆かれたということです。現世も五十歩百歩（これは孟子の至言）。国も政治も社会も個人も企業も嘘ではないかと思わせるような世の中。二千五百年前もそうだったというんです。

今朝ＪＲ洋光台からタクシーに乗ってきたんですけれども、面白い運転手さん「お寺お参りですか？」といわれるから「そうです。善光寺というお寺です」「ああ、美空ひばりのお墓のところですネ。ひばりとどんな関係があるんですか」という。「イエイエ今日はお不動さまの大祭です」「ああ、よかった。朝一番縁起のいいお客さんに出会うと必ず一日忙しいんですよ。ホントです。不況の折、よかった」とまたいう。なんだか人助けしているようで気持ちがいい。乗る前に乗り場前のベンチに座って一服していた。やがてタクシーへ。わずか五ｍぐらいです。運転手さんが「お客さん気づかっていただいて。ありがとうございます。私も吸うんです。やめられませんね。『まあ今日まではいい、明日から

禁煙』と部屋に貼って八年になります」という大笑い。「悪い悪いと思うんですけど、あした明日と。これが大人ですね」と運転手。私は返事に困りました。「いいことを教えていただきました」と申し上げ、程なく到着。「ありがとう」、結局三百八十円のツリ銭が受けとれず降りてしまいました。どうにも縁起のいい客にされてしまいました。少しのことで人間関係が美しくなってくる。私たちは、人をいろいろ指摘したり、なじったり、けなしたりしますけれども、自分がけなされたり、なじられたりしてはとても許せない。問題は心のあり方。

「仁」おもいやりとは

そこで孔子がおっしゃったのは、いまこそ『仁』が必要だと。人間生れた以上『ああ生れてよかった。生きてきてよかった』という思いを少しでも持って死ぬべきだ。そうでなければ意味がな

い。では、そうなるにはどうするか。政治も制度も大切。同時に人間同志の「生きる」ことに対する考え方も大切。そして、孔子が一番大切だと考えられたのは『おもいやり』すなわち『仁』だと。

「仁」という文字は人偏に『二』。二人のことです。二人の人間の間に成立するものが仁。夫と妻、兄と弟、先生と生徒、上司と部下、師匠と弟子、使う人と使われる人、あるいは道すがら出会った人、とかく二人なれば、生きていく上で道徳が生ずる。これが『思いやり』なんですね。相手の立場に立って考えようではないか。まさしく道元禅師の言う『自未得度先度他の心』なんですね。

余談ですが、ご皇室のそれぞれ歴代のお名前がありますよね。いったいどこで誰がお付けになったのかご存知の方？　山口会長、奥様、いかがですか。そ、そうなんです、さすがです。論語からなんです。いわゆる宮内庁から儒学者の方を複数名選び、たとえば先には東大や一橋大学の名誉教授、諸橋轍次・宇野哲人・吉川幸次郎先生など、こういう方々が四書五経、とくに論語の中からお付けになっている。本当だろうかとお思いでしょう、明治天皇のお名前ご存知の方ありますか？　大正天皇は？　昭和天皇、平成は？　歴代。睦仁、嘉仁、祐仁、昭仁、徳仁、文仁等々、すべて「仁」が用いられています。ここにご皇室の連綿とした思想と役割が表現されていると思います。

論語が日本に招来されたのは応神天皇（二八五年頃）の時代です。飛鳥時代よりも前です。仁とは何か。孔子が**「子曰く我が道　一つ以って貫く　ただ忠恕のみ」**。忠恕とは誠心誠意相手を思う「思いやりの心」。これこそが「仁」に至る最善唯一の方法だと教えています。一人の時は思いやらなくてもいい。気を遣うこともない。

二人になったらそうはいかない。そこに「仁」、思いやりがなければ美しい人間関係は成り立たない。宗教家も哲学者も思想家も起点は一緒なんです。孔子は「仁」、釈迦の「慈悲」、ソクラテスの「義」、キリストの「愛」。これすべて「恕」の一語に一貫共通している。恕なれば政治はどうでも、社会がどうでも、とにかく人間の関係というものは崩れない。もうすべて他人のことを思うということだけが、人間的な高まりを支えてくれる。「思いやりの心」は見ても、聞いても、読んでもわからないといわれています。ただ、人の喜ぶことに苦労して、その苦労をよろこぶ。人様から「アリガトウ」と言われて、はじめてわかる心だといわれます。

孔子は宗教家ではありません。儒教という元にはなっていますけれども宗教家ではない。哲学者です。どの書を見てもそのように示してあります。

お釈迦様は宗教家です。キリストもマホメットも宗教家です。でも地球上に宗教家は二人しかいないと。そのように信じられています。異論があれば教えてください。釈迦とキリスト。すべては二点からの分派。日本の神道は古来民族固有の伝統的な存在、民族宗教といえるかもしれませんすべて宇宙自然が相手です。

私はもともと浄土真宗でした。大圓和尚が善光寺を開かれた時、壇家がいないというんで「僕、檀家第一号になる」と言って約束してしまいました。母に「俺、宗旨変えしていいかな?」と。母「どこの宗旨…?」「曹洞宗という宗旨なんだけど」。「ふーん、その一番てっぺんにいるのは誰?」と言うから「たぶんお釈迦様ではないかな」と。あの頃私、知らなかったんです、宗教のことを。「ああそうかい。ウチも同じだから」。母はお釈迦様が一番上に在るということを知っていたんでしょうかね。実に簡単でした。五男

坊だから捨ておかれたのかもしれません。

孔子の論語とは

さて論語に示されている教訓は全部で四百九十九項目あるんです。字数はわずかに一万千七百字。これ、私が熟読、素読した論語です。五百十二ページ。開基社長より売りつけられた諸橋論語。「代金を払え」と三百五十円徴収されました。「金取らんと読まん」という。昭和三十四年、第十三版のものです。もうボロボロになってしまって、おそらく何百何千回とめくり、どこのどの行に何があるか、大概見ずに暗誦できるようです。私の生き方のバイブルです。

さて、論語学而第一番目。**「子曰く学びて時にこれを習う。また説(よろこ)ばしからずや。朋(とも)、遠方より来るあり。また楽しからずや。人知らずして慍(いきどお)らず。また君子ならずや」**。この言葉を聞いたことある人？　…ああ半分くらい。

これが孔子の思想なんですよ。だから哲学なんです。第一節目**「子曰く学びて時にこれを習う。また説ばしからずや」**「子」とあるのは孔子のことです。「人間は学んだ時都度これを実践する」。「習う」というのは実行。この話のあと写経がありますが、「手習い」まさしくこのことです。羽が白いいわゆる鳥が卵から孵って、白いうぶ毛でバタバタ巣ばたきをする。そして飛ぶ練習。そのうち徐々に黒く生えかわり巣立ちする。お坊さんも経を読んだら、必ず経の通り実行しなくちゃいかんということです。唱えたり、ただ読んだだけじゃダメなんです。お釈迦様のお心をいただいて、それを実践し結果を出す、そこで人々に伝導してゆく、自分のものでないものを届けようとしても受けとる人はいません。いかに人々に影響させるのか、させ得るかが真の僧侶と心得ていただきたいのです。難解な仏教を身近にさせるには生半可な行や話くらいでは、**仏心**を呼び興すことはできません。一言一句、一挙手一投足、全身全霊をうち込んでいただきたいのです。説得力はその中に在りです。人々が僧に求むるは「生き方」あるいは故人の魂と成仏への確信、五体癒され、心の安らぎを求める。ここに**「僧の力を借りたい」**と懇願しているのです。これが価値です。応えられますか。そういうようなふうに考える。

学んで実行していると、わからんことがわかってくる。これは何とも言えない。もう込み上げてくるよろこびだというんです。実践のない、口耳三寸の受け売りは届かないということです。

さらに第二節目**「朋、遠方より来るあり。また楽しからずや」**。自分が修養を積み高めていると共鳴者や同志の人たちが「ありゃあ、いい勉強している」「こりゃあ、立派なことを言う」「あの人のそばに居るだけで幸せを思う」。そんなことが、あまねく知れ亘って、やがて遠くからま

でたくさんの人々が慕い、訪ねてやってくる。これはなんとも楽しいことだ。

まさしくこの寺の大圓和尚というお方。最初はゼロからのスタートです。今は檀家三千五百を超えている。とても一寺院の数とは思えない。日本中探してもこんなお寺はない。これは大圓和尚のご人徳。学び、実行して、人のために尽くしたという足跡。今日の善光寺を表現していると思います。これが「朋、遠方より来るあり。また楽しからずや」です。

第三節目**「人知らずして慍らず。また君子ならずや」**。しかしながら、いかに修養できても、わかってくれない、認めてくれない人もある。あるいは逆に誤解されたり甚だしきは曲解される、人生必ずしも順路とは限らない、そんなとき、これを怨まず、尤めず、腹立てず自分の修養足りぬと、反省し、分に安んずるなら、これこそ立派な人だということです。私はよく大圓和尚や開基（社長）にお前は口先だけだ、ダメだと言われました。そんな時、心穏やかに「申し訳ない」というふうに参らぬのが私の業です、救い難し。

さて、学校では。よく「学習の時間」だと用いられますが、この語は二千五百年前、ここから生まれた言葉なのです。「自己啓発」もしかり、**「憤せざれば、啓せず、悱せざれば発せず」**。心を啓き、心をかきたてる。学習も啓発からです。これが孔子の原点なんです。とかく、学べ学べ、勉強しろ、実行しろと絶叫されているんです。

学問の終極とは、命を知る

結語四百九十九番目は堯曰です。論語というのはわずか一万千七百字。これくらいだから覚えようとしたら、だいだい覚えられる。繰り返しですから、みなさんのお経と同じです。結局、孔子が求めたのは何かといえば、**「子曰く命を知**

らざれば、もって君子たることなし。礼を知らざれば、もって立つことなし。言を知らざれば、もって人を知ることなし」。人間どんなに正しい行いをしても、吉凶禍福は必ずしも行いにふさわしくないことがある。時として耳にします。これまで私はいいことを考え、いいことをしてきた。でも、幸せは来ない。これ以上どうすればいいのですかと。どう聞いても、原因が人のせいになってしまう。こんなとき、恨んだり、悲しんだり、惑わないことが、肝心だと。非常に難しい徳目だと思います。

第一節目。「**命を知らざればもって君子たることなし**」、人間「いろいろ勉強すると自分の今がわかる」必ずしも「自分の力だけでいまがあるのではない」。実に多くの人たちのお陰。また見えない人たちの犠牲とその蓄積によって「生かされている」ことがわかる。それが少しわかりかけると、命を知ることになる。『自分は人に迷

惑をかけてないつもりでも、迷惑をかけなければ生きられないのが人間』。これは親鸞のおっしゃった言葉です。

迷惑をかけ続けて、いまがある。さて今日のお不動様は「人々の煩悩を断ち、強い意志と智慧で人々を救ってくださる尊い明王さま」だと紹介がありました。明王様とて、命を自覚せぬ者救いようがない。命にも天命、運命、禄命、徳命、知命、そして宿命。

生れるまでが宿命なら、生まれてのちを運命という。なお過ぎてしまった過去は宿命でもある。直せない、取り戻せない、変えられないという認識。お互いさま「いまの境遇が善かれ悪しかれ、誰の責任でもない。自分自身が持ち運び引きずって来たものだ。決して人のせいではない。」と自覚する。もしもいまを変えたいなら、変える努力をするという理解。『これが命を知る』と承知したい。これこそ積極的理解だと私は思います。

さて二節目**「礼を知らざれば、もって立つことなし」**。およそ「礼」とはどういうことかというと、礼は示偏。「示」がついたら神、仏、祭事、神霊より生ずる吉凶禍福。それに関わる文字が実に七十九字も並んでしまいます。

「礼」とは祭事に用いる三宝。また、仏、法、僧の三宝。など。この形が「禮」。三宝に、海山の恵みを盛って神仏に奉げる。目に見えない祖先や、諸々恩人、神仏があたかもそこに居ますが如く感謝の誠をささげ尽す。これすべて礼。

また自分を点として、その上下。この縦の線を感ずることが「礼」だと教えています。だからお盆・年忌法要・法事は**「礼」**の行事なんですね。これを承知しなかったら人間としては立てませんよ。立ったということにはなりません。

第三節目**「言を知らざれば以て人を知ることなし」**。最終の一行です。はじめは平凡な言葉だ

と思っていたんです。単に「言」というは、ことばです。ことばはその人の心を表現する。人の言と書いて「信」これいのち。ためにならない話とか、たわいのない話とか、人の悪口、うわさ話、おせじ、へつらい、不平不満愚痴など、心なく吐くような人は程度の人だとわかるわけです。「不平、不満、愚痴のことばに慣れたら感謝の言葉が使えなくなる」といいます。ああ。恐ろしい。また人のためを思い、忠言をくれる人、常に感謝とよろこびをもつ人は立派な人。その見分けができるかどうかというのが問題なんです。これを判断できる正しい標準は限りなく聖者、神、仏の教え。すべては無私の境地より生ずる真理。自分流では都合が優先、標準が狂ってしまう。スキキライに流れてしまうんです。

だから二千五百年以上経っても、その標準、真理が生き続けているのです。この真理を学ばねば、善悪の判断はできませんよと。さてなにかにつけ徳があったとか、徳がなかったとか言います。徳分が人間を評価する基準になっています。どういうことかというと徳とは「善をなし悪をなさない」その人の卓越せる能力だといわれます。

原典を見ろ

私はお陰さまで仏教の勉強を大圓和尚より随分させていただきました。「お陰さまで」です。参上すると、善光寺の書庫に案内され、毎度あれだこれだと山積みされる。「すべて原典を見ろ」と読ませていただいた。ゆえに多分、私には仏教の標準が少し備わったわけです。困ることは自分のことはそっちのけ仏教の標準で今の僧侶の方を見てしまう。すべてお坊さんという位置。これは人々の標準であったり、指針であったり、目標であったり、そういうことになっているわけです。お釈迦様の代理としてお仕えなのです

から。限りなく徳分が高くないといけない。私もそうです、お互い死ぬまで勉強しなければいけない。そこの熊谷総代さん、いま九十二歳、私どもに影響を与え続けておいでです。いまだ一緒に、行やお勤めをなさる。灰になるまで学ぶんだと誠にかくしゃくたる熊谷少年。老いることを忘れてしまっている。

さて「善光寺」の善はヒツジ偏。大圓和尚がすごいと思うのは開創のとき「善光寺」とされたことなんです。あの方が普通じゃなかったということはここにあるんです。「善光寺」というお寺は全国に数百ヵ寺あるんだそうです。そのなかの一つ、もっとも光り輝いているのが、手前味噌、横浜のここにある善光寺なんです。（大笑い）

キリストが連れ歩いたのは羊です。キリストがあの荒野に立ち、取り囲まれていた動物は羊なんです。孔子が神前に生け贄として捧げられた動物は羊なんです。これは、皆さんご存知だと思います。なぜ羊かというともっとも人間に従順で、人間に衣食をもたらし、そして人間をさいわいへと導いてくれる動物は羊なんです。幸という字は羊の上下かみ合わせ。幸を求めるなら自分が羊になる。応分の犠牲が伴うと教えています。種を蒔かず、花を求めてはいけませんということです。だから羊偏はすべて人間の尊厳に関わる文字になっています。善・義・犠・美・祥・翔・羮・羣等々。三十字以上が神聖な文字として表されています。

孔子の生涯

孔子は破格に偉い人だった。当時、国中がそう言ったんです。「もう、あなたは聖人、神様、仏様」。ところが「待て待て、そうじゃない」。「予はもともと立派じゃないんだよ」と。（七十四歳で亡くなっています。お釈迦様は八十歳だそう

ですけれども)「子曰く吾十有五にして学に志し、三十にして立ち、四十にして惑わず、五十にして天命を知る、六十にして耳順う、七十にして心の欲する所に従えども矩を踰えず」。と言われた。これテレビのコマーシャルなんかで出ていましたね。聞いたことのある人？　ああ、ほぼ皆さん耳にされている。

七十歳の孔子は、だれに何を言われても「はい。はい。はいそうですか」と、やはり偉いお方は違います。ハイハイハイとね。天地の開きを思います。近寄れません。孔子最晩年のこと「七十にして心の欲するところに従えども矩を越えず」。「矩」というのは規準、標準、コンパスです。予も人並みにこういう課程を踏んできたいま、ようやく万事心の思うがまま振舞っても道に違っていない。すでに聖人の境地に達し、多分に天の運行と道理に合致された姿とも見得られます。まさしく人間孔子の聖者たる所以。

かく云う私もすでに七十を超えてしまいました。コンパスの目盛りがぼやーんとしているんです。自分の欠点や誤ちになかなか気づかない直せないでいます。

論語は本当に身近なものです。楽しくて、面白くて、明快で、見事なQ&A。一発解答をくれる。しかもひとつの問題にあらゆる角度から、あらゆる答えを指し示す。いかにも「人を見て法を説け」聖者はいずこにあっても異口同音。お釈迦様もまた相手の能力や人柄に応じ、法を説かれたという。毎日の雑談の中で。論語というものは私を呼び興してくれる。人生が一本筋なら、ただ歩いて行けばいい。だが途中、二本に分かれ、無数に分かれてくる都度、悩む、どちらに行くか、判断する必要がある。行くか、止まるか、左か、右か、さてどうする？　こんな時の規準が「論語」だったんです。いつでも啓発させてくれる。もしも、私に論語がなかっ

たら、お釈迦様も、仏教も、キリストも大圓武志和尚も楽しく、深く、篤く、理解できなかったと思います。実践となるとなかなか伴いません。ただ口先だけではあります。私これまでの表現、不適切なもの多々あります。失礼、無礼お詫び申し上げます。

さていよいよエピローグ。お釈迦様は生き方と心の標準を諭し、さらに死んでから先までそこに極楽浄土があることを教えてくれます。でも、孔子は死ぬまでしか教えてくれません。死について、いっさい教えてくれていません。ある時、弟子が「先生神々に仕える心得を」と問います。孔子は「まだ人間に仕えることも十分でない者が、神に仕えるどころではない」と。また、「先生死とはなんですか?」と弟子が聞きます。「ばかを言うな。生き方のわからんヤツに死に方がわかるか」。これが答えです。

ありがとうございました。

光真寺本堂前にて

善光寺旅行会 ご報告

善光寺旅行会・婦人会では檀信徒の皆さんとの親交と信仰を目的とした旅行を企画しております。

今年も恒例の本寺光真寺地蔵尊夏大祭に参拝致しました。

また、十月には長野善光寺にお詣り致しました。共に、なごやかな雰囲気につつまれた有意義なバスの旅でした。

来年は山形県鶴岡市の善寶寺の参拝旅行を企画しております。皆様のご参加を心よりおまち申し上げております。

光真寺地蔵尊夏大祭

光真寺へのバス旅行は前回まで一泊二日の予定で計画されていましたが、これまで参加されたことのない方にも気軽にご参加いただけるように、今回は日帰り旅行となりました。

神秘的な護摩祈祷とお砂踏み

バスは朝六時三十分、善光寺を出発。横浜駅西口で途中からの参加者と合流して、東北自動車道を一路、矢板インターチェンジに向い、十時に第一の目的地、光真寺に到着しました。光真寺では採れたてのとうもろこしやナス、キュウリのお漬け物でおもてなしいただき、その新鮮なおいしさに一同、感激。ひと息ついて、参拝に進みました。

本堂まで進む廊下には、光真寺住職俊雄老師

四国八十八霊場のお砂踏み

が四国八十八霊場を巡って集められたそれぞれのお寺の砂が縫い込まれた白い布が敷かれていました。一行はこれを一枚一枚踏んで歩くと、お遍路したのと同じご利益があるという「お砂踏み」という行列に加わりました。本堂では曹洞宗では珍しい護摩が焚かれ、赤々と燃え上がる炎を見ていると、自分の悩み、苦しみを取り除いて頂いたような感動を覚えました。

二班にわかれて、観光と温泉に

光真寺を出発した一行は昼食をとる那須高原「お菓子の城」へ向かいました。ここで食事をとった後、この場所にある温泉でくつろぐグループと、バスで那須湯本の殺生河原に向かうグループとにわかれました。

霧雨に煙る殺生河原はたくさんの地蔵と荒々しい岩肌が印象的。殺生河原から温泉神社を回

護摩祈祷

る遊歩道は露に濡れた緑の樹々が清々しさを見せていました。温泉神社を下りて、土産屋の並ぶ道に接するところに、「あれっ！」。東屋風の小さな木造の建物には「こんばいろの湯」と書かれた看板があります。誰もが無料で入れる足湯の温泉でした。ちょっと熱めの温泉は水道水でうめるとちょうどいい湯加減。三十分ほどの散策を楽しんだ足には、いいリラックスタイムでした。観光もできて、足湯にも入れて、バスグループはちょっと得した感じです。

このグループを乗せたバスは、温泉組を迎えに「お菓子の城」へ。そして、一路、横浜善光寺への帰路につきました。横浜駅西口を経由して、夜七時に善光寺到着。お土産も、土産話もいっぱいのバス旅行でした。お土産話を参加した皆さんのレポートでご紹介しましょう。

ありがとう

阿部　毅正

横浜駅西口の地下道から快晴の天理ビル前に出ると、朝七時前なのに沢山の人達がそれぞれ目的のバスを待っていました。人波をぬって三～四人のバスツアーのガイドさんが小旗やボードを掲げて顔に汗を浮かべ、案内をしていました。

筆者

「横浜善光寺」の小旗を背中に、檀家総代である東郷さんがメモを片手に待っていてくれました。東郷さんの顔を見て「ほっ」としたのは、私だけではないでしょう。

七月二十三日に行われた善光寺主催の「大田山光真寺地蔵尊夏大祭と那須高原」の日帰りバス旅行に、初めて参加させて頂きました。気になっていた参加者数を聞いたところ、三十九名すべて大人とのことでした。

九十一歳とは思えない、かくしゃくとした檀家総代の熊谷さんと東郷さんから、一五四五年建立の光真寺の歴史等を含めた含蓄のある話を聞き、相鉄バスガイドの「羽田空港で今、工事している管制塔は完成しなければ管制塔でない」等、車外の案内を聞いているうちに光真寺に到着。

大田原城主の家紋の入った山門、副住職や大勢の檀家に出迎えられました。しばし大広間で、

朝獲りのなすときゅうりのおいしい漬物でバスに揺られた体を休めました。その後、巡礼装束に身を固めた檀家の金剛杖の鈴の音に先導され、小袋に入れられた四国八十八霊場の砂を踏み締めて、本堂でのご祈祷に向かいました。

赤々と燃えあがる護摩の炎を目の前に般若心経を唱え、住職さんに身を清めていただきました。帰りにも住職さんはじめ、大勢の方々の見送りを受け、気持ちよく光真寺をあとにしました。

那須高原「お菓子の城」で昼食後、温泉入浴組と観光組とに分かれ、私は殺生石を見たあと、温泉神社で足湯を味わうことができました。

さて、今日の旅行は、成寿山善光寺創建三十九年目であり、参加者も三十九名。そして四国巡礼三十九番札所、土佐半田村寺山延光寺の砂も踏むことができました。楽しかった旅行、「サンキュー」でした。

光真寺参詣に参加して

羽部奈緒子

そろそろ会社の有給を消化しなくては、と思っていた丁度その折、母に誘われたのが今回参加させていただいた日帰り旅行です。

光真寺は、今なお懐かしい先代方丈様のご実家だと以前から聞いてはおりましたが、私と母は今回が初めての参詣でした。

当日の朝、普段ならまだ寝ている時間に集合場所へ行き、「少し早めの夏休みだぞ」と、どこかウキウキした気持ちでバスに乗り込みました。

学生時代をキリスト教の学校で過ごし、二年前に祖父が亡くなるまで家に仏壇もなかった私にとって、「お寺の参詣」と言えば今までは鎌倉や京都への観光を指していました。

光真寺に着いて、まず振る舞っていただいたとれたて野菜のお漬物。和気あいあいとそれを頂きながら、田舎に遊びに来たような不思議な感覚から抜けられません。

こらこら私、これからお寺へお参りをするんだぞと思っても、厳粛な気持ちはどこへやら。般若心経を手に正座をしても、むしろ少し懐かしいような気持ちでした。まるで、学生時代に毎日当たり前に学校のチャペルへ行き、礼拝に臨んでいた時のような。

言葉としては知っていましたが、そのあと始まった「護摩焚き」は想像を超えて圧巻でした。百聞は一見にしかず、とはまさにこのこと。

パチパチと火がはぜ、お経がパタパタとはためき、般若心経を幾度も唱和する声が響き、混じり合って、お堂に満ちていました。

そこは、懐かしいような日常と飲み込まれそうな非日常の混在した綺麗で厳かな、とても不

向かって左が筆者

可思議な空間でした。

仏教について、お寺について、難しいことは分かりません。しかしお仏壇に毎朝手を合わせたり、折々に墓参りをしたりする当たり前のことのその先に、何かがあるのかなと思いました。

それはすぐに答えの出る明確なものではありませんが、今後お寺で手を合わせる時に、観光気分や「型どおりの厳粛さ」とは違った何かを感じられるのではないかと思っています。

今回、何の知識もないまま参加させていただきましたが、このような機会にお誘い頂いて本当にありがとうございました。

また次の機会にお誘い頂けることを期待しつつ、少し仏教について勉強しようと心に誓った若輩者でございました。

大田山光真寺旅行記

大野　孝雄

平成二十年七月二十三日、バスにて東北自動車道を一路北上し、到着した大田山光真寺は、大野家の菩提寺でもある。栃木県北部那須の原の麓に開かれた大田原は、昔は寒村であり、その「仲町」という所で小児科の開業医を営んでいた父はよく光真寺に呼ばれ、往診に行っては、診療後真っ直ぐ病院に帰らず、お酒などをご馳走になっていたようであった。後年、私が先代方丈から食事によばれることが多いのは、この親同士の因縁かもしれない。

光真寺は、大田原城主の菩提寺であり、小さな町の文化の発信源でもある。

夏。町内の各所で行われる盆踊りは、地元の人の楽しみの一つでもあるが、夏の夜のメインイベントは、光真寺で開催される「地蔵尊百丈祭千燈供養」である。光真寺の長い渡り廊下一杯に蝋燭が灯され、それが「千燈」の意味であ

筆者

るが、外界の闇の中にゆれ動く光の数々。そこに幻想的な世界が出現し、子供心にもあの世はかくもありなんと思い浮かべたものであった。

この日、本堂に座し、三十七世俊雄老師の読経に唱和していると、何処からともなく「おい、大野。どうしている。俺は、善光寺の基礎を強固に築いたつもりだ。檀家三千余名のお寺をつくり上げたが、少し早く走り過ぎたかも知れない。まだまだやりたいことが山ほどあり、このまま逝ってたまるかとの無念の情、溢れていたが、いま博志の成長振りを見るに、これでよかったのかも知れないという思いだ。これも現世の宿命か」、懐かしい声が聞こえてきた。

「方丈。博志は、お前の自慢の息子だけあって立派に成長。事業をきちんと踏襲、順調に発展させている。今回日帰り旅行もその一つだ。まあ見ていてくれ」。読経が終わり本堂を出ると油蝉が一斉に鳴き出したのであった。

善光寺霊園ニュース

横浜やすらぎの郷霊園

平成十一年九月に開園致しました、横浜やすらぎの郷霊園もまもなく十年を迎える事になります。開園の頃は細かった若木たちも今では涼しげな木陰を作るまでに大きくなりました。

やすらぎ通信

平成十八年より発刊している季刊紙です。この秋彼岸には十一号を数えました。

管理事務所からのニュースや善光寺の各行事のご案内・報告などの記事の他に、園内の四季折々の風景を載せています。興味のある方は霊園管理事務所に置いてありますのでお気軽にお持ち下さい。また善光寺の一斉法要でもお配りしております。

〈五輪塔（卒塔婆）に見る仏教の世界観〉

（やすらぎ通信Vol・11より抜粋）

仏教の世界観、その基本は縁起の理法です。我々は様々な縁が重なり合ってこの世に存在し、社会生活を営んでいます。細胞などのミクロレベルの命を宿す我々の肉体にしても同様の事が言えます。

二千五百年以上も前の時代には、現在のような科学的に元素とか分子とかの概念がない中で、すべての存在を構成する元素を四つに分けて考えました。

それは地・水・火・風の四つの元素。

地とは硬いもの。水とは液体のもの。火とは熱をもつもの。風とは動きのあるもの。

この地水火風（四大）が様々な縁で仮に結びつき（和合し）万物は構成されています。

これを四大仮和合と言い、諸行無常といわれる移り変わりの世の中で、我々はこの四大仮和合の命を生きています。その縁が尽きるとそれぞれ元の四大に戻っていくと考えられていました。

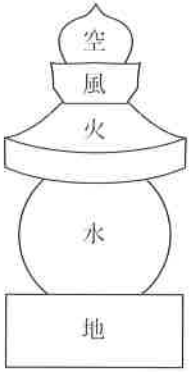
さて地水火風の四大、五輪にはひとつ足りませんね。

最後のひとつは空です。

空とは四大を結びつけている縁の事。

全てのものは単体で存在するのではなく、全て結びつきによって存在しているという事。

それは諸法無我と言われ仏教の根本をなす考え方です。四大に空を足して五大になります。



この五大を五輪の形に当てはめると、一番下

の四角は地を、その上の円相は水を、その上の三角形は火を、その上の半円形は風を、表しています。一番上の宝珠型は空を表しています。

供養塔である卒塔婆。亡き方に向けられての供養ですが、その功徳は廻って施主へと戻ると言われます。それは空の考え方に基づき、縁あっての命を感じる事、おかげさまの心、感謝の心を持つ事によって廻らされるのでしょう。

今、自分があることに対してのご縁、それは、先祖から続く命の流れを受け止め、しっかりと命を生きる事だと思います。

塔婆を建てる事は亡き人に対して手紙を送る事、と言われる方もいます。

感謝の思いを込めて手紙を送りたいですね。

合掌

卒塔婆の偈

一見卒塔婆　永離三悪道
何況建立者　必生安楽国

意訳　一度でも塔婆を拝むだけで、悪道といわれる世界から離れる事ができる。また卒塔婆を建立するならば必ず安楽国といわれる仏の世界に生まれる事ができる。

港南ひばりの森霊園

門柱の落慶式を挙行しました

待望の門柱が完成、七月十日に善光寺関係者、檀家総代、日野石材工業協同組合の皆様と、現地で落慶式が行われました。普段は小鳥のさえずりが聞こえるひばりの森に、善光寺の僧侶の読経が響きました。

御影石にくっきりと「港南ひばりの森霊園」と刻まれた門柱は高さ約三メートルと堂々としたもの。日野石材工業協同組合のご尽力によって完成に至りました。

南向きの斜面に位置する陽当たりのいい墓苑。霊園の入口で存在感を示すこの門柱は、港南ひばりの森霊園のイメージアップに貢献するでしょう。

まだまだ、見晴らしのいい区画が一部残っています。墓地の購入のお考えご計画には、ぜひ、ご検討ください。

坐禅会・写経会のお知らせ

のご参加もお待ちしております。お気軽にご参加ください。

坐禅会

善光寺では毎月第一日曜日の早朝六時からと、第四日曜日午後三時から坐禅会を行っております。

早朝坐禅の後は、朝のお勤めをし、その後、禅寺の作法に従って、お粥を召し上がっていただきます。

午後の坐禅会は、育英会でご縁を頂いた藤田一照老師に坐禅指導と、その後『正法眼蔵』「行持」を提唱して頂いています。

これまでに坐禅の経験のない方、初心者の方

平成21年 善光寺坐禅会 年間予定表

■日曜坐禅会　毎月第４日曜日(※３月のみ第５日曜日)　午後３時から

提唱：藤田 一照 老師「正法眼蔵 行持」

１月25日（日曜日）	７月26日（　〃　）	午後 3:00～ 体操(体ほぐし) 3:30～ 小休 3:40～ 坐禅 4:10～ 経行 4:20～ 坐禅 4:50～ 小休 5:00～ 提唱 6:00　閉会
２月22日（　〃　）	８月23日（　〃　）	
※３月29日（　〃　）	９月27日（　〃　）	
４月26日（　〃　）	10月25日（　〃　）	
５月24日（　〃　）	11月22日（　〃　）	
６月28日（　〃　）	12月は、お休みです。	

■早朝参禅会　毎月第１日曜日　午前朝６時から

１月４日（日曜日）	７月５日（日曜日）	午前 5:45　集合 6:00～ 坐禅・読経 7:00～ 朝食(お粥)
２月１日（日曜日）	８月２日（日曜日）	
３月１日（日曜日）	９月６日（日曜日）	
４月５日（日曜日）	10月４日（日曜日）	
５月３日（日曜日）	11月１日（日曜日）	
６月７日（日曜日）	12月６日（日曜日）	

場所：善光寺　釈迦殿

費用：無料

服装：ゆったりとしたもの。靴下は履きません。時計やアクセサリーは、はずしてください。

※参禅ご希望の方は、前日午後７時までにご連絡下さい。

写経会

お写経は、自らの信仰を深めるだけでなく、ご先祖の追善、あるいは諸願成就の祈りを込めて行う一つの修行です。

善光寺では月一回、左記にて「写経会」を開催中です。

どうぞご参加ください。

【日時】毎月二十八日（六月・十二月は休み）
午後二時より約一時間半

【場所】善光寺不動殿

【読経】「般若心経」を全員で看読

【写経】引き続きお写経「般若心経」

【費用】無料

※お手本・筆・硯・墨・写経用紙など一式準備します。ご自分の道具を持参されても結構です。

※参加の方は準備の都合上、前日迄にご連絡下さい。

参禅会・写経会ともに連絡：

善光寺　横浜市港南区日野中央一―十二―九
（〒二三四―〇〇五三）
電話：〇四五―八四五―一三七一
ファックス：〇四五―八四六―二〇〇〇
Eメール：info @ zenkouji. net
URL：http: // zenkouji. net

〔目的〕

佛教を修学する者のうち、学業操業ともに優秀にして身心堅固なものを海外に派遣し、または海外より日本国内に受け入れ、佛教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る有為な人材を育成することを目的とする。

〔派遣先〕

1．Zen Center of Los Angeles（ＬＡ禅センター）
“923 S.Normandy Ave., LA., CA90006 U.S.A”
2．Zen Mountain Manastry of New York（ＮＹ禅センター）
“Box 197,Mt.Tremper,NY 12547 U.S.A”
3．Zen -Zentrum Eisenbuch（アイゼンブッフ・禅センター）
“Eisenbuch 7 D-84567 Erlbach Deutchland Germany”
4．Wat Paknam（ワットパクナム）
“Bhasichareon Bangkok, 10160 Thailand”
5．理事会において必要と認めるその他の国に所在する研究機関、並びに国内仏教関係大学及び寺院

〔派遣期間〕

平成22年４月より１年間

〔給費〕

アメリカ・タイおよびその他の国における滞在に要する必要経費並びにその往復旅費

〔提出書類〕

1．論文（次項による）
○論題
①これからの国際交流と仏教の役割
②世界平和と仏教徒の誓願
③留学僧として私はこれを学びたい
④異文化の中で仏教を学ぶ
いずれか一題を選ぶこと　400字詰原稿用紙５枚以上（Ａ４判タテ書き）
2．保証人と連署した願書　3.卒業証明書
4．履歴書　5.推薦書　6.健康診断書

〔募集人数〕

平成22年度若干名

平成21年12月10日、事務局必着のこと

〔発表〕

平成22年１月10日、本人に通知する

横浜善光寺留学僧育英会
〒234-0053　横浜市港南区日野中央１丁目12番９号
TEL.045-845-1371　FAX.045-846-2000

第23回生

横浜善光寺留学僧募集

平成22年度・2010

横浜善光寺留学僧育英会は、海外留学僧を募集いたします。
ご希望の方はご応募ください。
詳しくは、宗教法人横浜善光寺留学僧育英会の
規程ならびに細則をごらんください。

ZENKŌJI
YOKOHAMA

育英会寄付者

■平成19年度

神奈川区　滝沢　孝子殿
清瀬市　本田　昭仁殿
磯子区　瀧澤　武雄殿
北海道　大粒来和夫殿
東　京　胡　建明殿
東　京　宮田林産株式会社殿
瀬谷区　城下栄三郎殿
港南区　横浜栄光道院殿
港南区　南　有里殿

■平成20年度

神奈川区　滝沢　孝子殿
金沢区　黒河内貞子殿
南　区　上村　伊一殿
栃　木　佐貫八重子殿
栃　木　光　真　寺殿
岡　山　観　音　寺殿
栃　木　太田　正孝殿
兵　庫　東郷　公殿
東　京　新井マサヱ殿
東　京　宮田林産株式会社殿
東　京　富田　繁殿
鶴見区　宮本　延雄殿
港南区　貞　昌　院殿
千　葉　村田　一夫殿
綾瀬市　新舘　杲殿
東　京　福　厳　寺殿
鶴見区　吉田　健一殿
栃　木　明　林　寺殿
港南区　木村　晶殿
金沢区　高橋　則孝殿
港南区　星野　一男殿
愛　知　崎山　邦夫殿

ご寄付賜りありがとうございます。

黒田博志住職　結婚

平成二十年五月六日（火）五月晴れに恵まれた中、善光寺釈迦殿において当山住職・黒田博志と遠藤明男氏次女真由美さんの結婚式がご本尊様のみそなわすもと厳かに執り行われました。式師は加賀大乗寺山主・東隆眞老師にお勤め頂き、小田原市成願寺住職・山口晴通老師ご夫妻に媒酌の労をお取り頂きました。

当日、紅白の幕に飾られ、荘厳された釈迦殿にてご両家の親族が待つ本堂にご媒酌人に付き添われ、緊張気味の新郎新婦が入場し、続いてお二人をお導き頂く式師様が入堂。式師様は啓白文を奉読されお二人の結婚をご本尊様にご報告申し上げ、新郎新婦は誓約文を読み上げ今日の喜びと人生の門出に当たっての決意の程を述べました。

ニュース・アラカルト

式師、大乗寺山主東隆眞老師

寿珠の交換を行い、式師様御発声の元、固めの盃を皆で交わし、般若心経を読経して、今までの全てのご縁に感謝申し上げ仏前結婚式が結ばれました。

その後、場所を移して行われた披露宴ではご両家にゆかりの深い二百名を超す方々がお祝いにお集まり下さいました。

ご祝辞は、式師をお勤めいただいた東老師、新郎が永平寺で安居していた折に大変お世話になった札幌中央寺南澤道人老師に頂戴いたしました。宴中、善光寺ファミリーでマイウェイを合唱するなど、盛大に二人の門出をお祝い頂きました。

最後に「今まで頂いたご縁、皆様のご芳情に感謝し、更に一僧侶、善光寺の住職として精進する事をお誓い申し上げます」と住職が挨拶をしてお開きとなりました。ありがとうございました。

ニュース・アラカルト

ご本尊様に結婚の誓約を行った博志住職と真由美さん

福田孝雄老師を山形に訪ねて

数年前まで、善光寺の一斉法要などで、ご法話をいただいた福田孝雄老師は現在、山形市の高松寺でご住職としてご活躍されています。七月、善寶寺を訪れた博志住職とその一行は、その足で福田老師のもとを訪れました。

大圓大和尚と駒沢大学大学院時代の同窓で三心会の会員でもある福田老師は大学院修了後も長く寺を持つことなく、横浜に居を構え、仏教研究を続けておられました。そして、その仏教に対する深い造詣から、善光寺でのご法話などで私たちを導いてくださいました。

二年前、その福田老師が縁あって、故郷、山形の高松寺を継承されることになりました。学生時代からずっと東京、横浜で暮らしておられた福田老師だけに、当初、山形の生活にも戸惑

左より、ご子息智昭さん、奥様、福田老師、博志住職、東郷総代

いがあったようですが、今ではすっかり地域の生活習慣にも慣れ、奥様や善光寺でもお手伝いをいただいたご子息智昭さんとともに高松寺を守っておられます。

博志住職との懐かしい会話の中では「大圓和尚の仏教活動は宗旨という枠の中で実践されることに苦労しておられたようです。その度量の大きさはもはや宗門を超えていました」と、在りし日の大圓和尚の姿を振り返っていました。

高松寺住職福田孝雄老師

ニュース・アラカルト

大乗寺・徹通禅師七百回御遠忌に随喜

去る平成二十年十月十一日から十四日まで金沢市大乗寺にて永平寺三世、大乗寺開山徹通禅師の七百回御遠忌法要が厳修されました。

大乗寺には昨年五月に檀信徒約七十名による参拝旅行を致しました。（大乗寺について詳しくは成寿37、38号を参照下さい）

山主の東隆眞老師にはその際、大変よくして頂き、また今年の五月には博志住職の結婚式での式師もお勤めいただいております。

今回の御遠忌にあたり、十三、十四日に住職と前平師が随喜致しました。

両日共、秋晴れの天候に恵まれ、時おり涼風が吹き抜ける大乗寺の山内には入りきれない程の檀信徒の方々、随喜御寺院の方々が参詣されていました。

十三日の逮夜諷経導師は総持寺前貫主の板橋興宗禅師、十四日の御正当献香諷経、献供諷経は総持寺貫主の大道晃仙禅師、永平寺貫主の福山諦法禅師が導師を勤められました。

法要中、徹通禅師を「道元禅師と瑩山禅師をつなぐ宗門の大恩人なり」と遺徳をたたえる『疏』が読み上げられ、この御遠忌のテーマである徹通禅師の顕彰の意が表されました。

先代住職が健在であれば、旧知の東老師が厳修されたこの御遠忌の円成を大変喜ばれた事に想いをはせ、また仏縁によってこの場所に随喜させて頂いた事、感謝申し上げます。

この春より上山して修行に励んでいる善光寺徒弟の戸澤洋太師にも久しぶりに会いました。頑張っている姿を見て、安心すると同時に今後の更なる精進を期待いたします。

ニュース・アラカルト

修行中の戸澤洋太師を囲んで

中村茂子さんが善光寺婦人会の会長に

善光寺婦人会ではこれまで会長を伊藤初枝さんにお務めいただいておりましたが、この度、今まで副会長をお務めいただいていた中村茂子さんが、新たに会長に就任されることを檀家総代会で決定しましたので、ご報告します。

伊藤初枝さんは善光寺開創以来、長きにわたって、婦人会会長という立場から壇信徒の皆さまのリーダーとして、多大な活躍をしていただきました。その功績は皆さまに十分ご周知のことと思います。こうした地道でありながら、着実なお仕事には大変感謝しています。今後は名誉会長としてお支え下さいます。どうもありがとうございました。

新たに会長となられた中村茂子さんには既に、光真寺への壇信徒旅行・善光寺への参詣旅行などでも、まとめ役としてご参加いただきました。これからもいろいろな面でご活躍が期待されています。よろしくお願い申し上げます。

まとなられた武志老師も心より御安心されていることだろうと思いました。後を立派につがれて本当によろこんでおられることと思います。

留学僧再開に敬意

正林寺住職　田中良昭老師　静岡県

『成寿』第三十八巻を拝受しました。大圓大和尚様の遺徳を巻頭の三回忌法要のカラー写真で偲びつつ、博志住職さんの新たな決意を「巻頭言」で伺わせていただきました。特に先師が心血を注がれた留学僧育英会の再開を決意された事に深く敬意を表します。

時の早さを実感

日泰寺住職　鷲見弘明老師　愛知県

大圓武志老師の三回忌の『成寿』誌拝見。時の経つ早さを感じます。

博志宗師のご継承ぶりを拝し何よりと存じます。

ご活躍嬉しく拝見

雲洞庵　新井勝龍老師　新潟県

『成寿』三十八号拝受いたしました。先師様の三回忌法要や子安観音様の開眼等、先師様の御後継者としてのご活躍大変嬉しく有難く存じております。

今後ますますの御精進御発展をお祈り申し上げます。

故人の着眼に敬服

少林寺住職　井上貫道老師　静岡県

『成寿』三十八号拝受し、今更の様に故人の着眼されし諸行事に敬服しております。

そのうちまたご縁が頂ければありがたく存じます。

今も脳裏に浮かぶ姿

島根県
佐瀬道淳老師

『成寿』有難うございました。大乗寺様の晋山式でお逢い致したのが最後となりました。あの折の道旧疏だったのでしょうか、武志大和尚様の朗々としたお唱えのお声とお姿が今も脳裏に焼付いております。駒大では一年違いであったかと存じますが東老師のご縁もあってか、この『成寿』誌も永年に亘って拝読させて頂き感激いたしております。新しい時代のしかもその先端を走り続けておられるお姿に敬意を表すると共に、そのお寺にも是非一度拝登させて頂こうと思いつつ果たされぬ中にご遷化になられ残念でなりません。十三日には自坊にて、献香し、品位の増崇を念じ上げます。

師と仰ぐ先代との御縁

福井県
瑞洞院住職　小田興雲老師

昨年九月のドイツでの普門寺晋山式でお会いしたのが思い出されます。

『成寿』三十八号拝受し御先代の三回忌、誠に早いものです。御先代の温かい人柄、はげましの言葉を大切にしています。

また、博志住職の綿密な行事、檀信徒への教化を心から敬服しております。

小生の僧経験で数少ない師と仰ぐ先代大圓武志大和尚との御縁を大切にしたく思っています。

師父の偉大さを知る

愛知県
天寧寺住職　大野栄人老師

『成寿』をお送り下さいまして、厚く御礼を申し上げます。

私も師父を亡くしてはじめて師父の偉大さを知りました。御尊師の後を継がれ、利他行を実践されつづけられるということは、大変なことと存じます。御精進下さいますよう念じております。

懐かしく拝見

山梨県
延命院住職　神田重陽老師

『成寿』冬季号ありがたく拝受致しました。

大圓武志大和尚のお写真拝見しつつ、生前のお元気の時のこと、又、いろいろとお世話になったこと思い出して、なつかしく感じております。

清々しい印象

板橋区
形山俊彦様

新着の『成寿』を拝見し、紙面全体が明るく、清々しい印象をもち、善光寺様の御隆盛を確信して嬉しく思います。

嘶家冥利に尽く

東京都
三遊亭王楽様

先達は「節分追儺式法会」にて御世話になりまして、誠に有難う御座居ました。

昨年に引き続き、また本年も呼んで頂けた事、嘶家冥利に尽きます。是非来年もお声掛け頂けたら幸いと存じます。

雪の中の節分追儺

東京都
小澤茂美様

「節分追儺法会」に於いては、昨年に続き落語会を開催させて頂き、誠にありがとうございました。雪の中お集まり頂けた檀家様が、お楽しみ頂ければ幸甚に存じます。

高く永くともす灯

富山県
浅香　恵様

大圓大和尚様の亡き後、博志住職様を中心として倫子様をはじめとする皆様方が、灯をたやさないようにしておいでの御姿は尊いと思います。

善光寺留学僧育英会の再開と、「ほほえみ子安観音菩薩」さまのお迎えと、御活躍の様子を、大圓大和尚様は天国で喜んでおいでのことと存じます。

乱世を思わせる世相のなかに、成寿山善光寺の灯を高く永くともしていって下さいますように、お祈り申し上げます。

楽しい『成寿』

荒川区
横山義彦様

大変楽しい『成寿』をありがとうございます。何度もみせていただき、温かいお心に触れ感謝しています。

なまくら者でして、永見寺のご老師をなやましています。

ご先代様は私の山形の長秀寺（大場玄宗和尚）と永平寺の修行時代が一緒で「武士（ブシ）殿」となつかしがっていました。

観音菩薩に感動

千葉県
藤田正子様

『成寿』第三十八号が届けられました。心をときめかせながら袋を開くと、明るく美しいピンク色に太陽のように輝く黄色い文字で、『成寿』と描かれた表紙。美しい伊藤先生の観音菩薩様の御作品、ハッとしてしばし、私は何もいえずに感動しておりました。中をあけますと、ご立派に又本当に仏様の様な慈愛に満ちた博志住職様の御写真、いやな

つかしい。住職の御母堂様のお姿がところどころに拝見出来、善光寺様の将来に又、明るい未来を見ました。これからもよろしく、一層がんばって下さいませ。

太い道を通じて

東郷　優様　兵庫県

偉大なる父であっただけに、後をつぐ二代住職として、職として人間として太い道を通じ、善光寺の可能性を、偉大な母上を扶け、多くの信者を扶け、自分の健康を扶けて、頑張って下さい。それのみ祈って居ります。

インド仏跡の旅想う

早田啓子様　三鷹市

思えば、先代方丈様、佐藤御老師、安井さんの御三方とインド仏跡の旅がなつかしく思い出されます。

私も又一人、巡礼の旅を続けております。今年はアンコールワットや中国の奥地に入りました。

嬉しい育英会再開

松下正弘様　埼玉県

『成寿』三十八巻の特集「育英会再開に向けて」を拝読させていただき、嬉しく思いました。私は留学育英生ではありませんが、五年前（二〇〇二年）にワットパクナムで得度した際には大圓大和尚に大変心から支援いただきました。私が還俗後、どなたも日本人で出家せず寂しい思いでした。これからの善光寺の国際的な留学僧育英会の発展と活動を心から祈っております。

編集後記

▼成寿39号も多くの方のご至誠ご協力を頂き無事発行できました。厚く厚く御礼申し上げます。

▼諸般の事情により、一時期内献で勤めさせて頂いておりました不動明王大祭。本年は盛大に執り行うことが出来ました。師父大圓大和尚は晩年「博志、お不動様は善光寺の守り本尊。今日すべてのご縁はお不動さまのお蔭。大祭を通して、仏様とお不動さまに感謝の誠を尽すことが大切」と申しておりました。

▼大祭に先立ち、善光寺開創当時、よくお話をいただいていた開基故村岡満義（論語の大家）の一番弟子である、総代東郷敏氏に論語のお話をいただきました。有意義なひとときでした。不動殿はなにぶん手狭であるので、写経会の方々を中心にお集まりいただき、案内の発送は致しませんでした。来年も執り行う予定でございます。ご参詣をお待ちしております。

▼六月大本山總持寺に斉藤副貫首老師を訪ね、くつろいだ雰囲気のなかで、師父の想い出話をたくさん頂戴しました。

▼七月、山形の善寶寺では師父のご友人大八木春邦老師、高松寺では福田孝雄老師ご家族に大変お世話になりました。

▼恒例の光真寺参拝旅行。今年は日帰りでした。初めての試みでしたが楽しい一日となりました。

▼十月、長野善光寺詣りに加えて須坂の興国寺にもお詣りいたしました。このお寺は私の祖母の実家にあたり、曾祖父興国寺三十一世玄慶朴翁大和尚のご供養を旅団一同で厚く尽すことができました。また新築された大庫裏には圧倒されました。

▼今年の一月より、早朝坐禅会とは別に、新たに日曜日の夕方、坐禅会を開催しております。この会は、第九回育英生藤田一照老師にご指導、提唱頂いております。この二つの坐禅会を始め、写経会、書道教室と、多勢の方々にご参加頂いております。お気軽にお越し下さい。お待ちしております。

▼結婚して半年が経ちました。体重も少々増え、おかげさまで円満です。まだまだ、若輩の二人でございます。今後とも温かく厳しくお導き頂きますことをお願い申し上げます。

▼明年一月九日（金）は新年祈祷会です。皆様お揃いでお詣りください。向寒の砌、どうぞ御身体に御留意いただき佳いお年をお迎えください。

（博志）

成寿　第三十九巻
平成二十年十二月十日発行
発行所　成寿山善光寺
横浜市港南区日野中央一丁目
十二番九号
電話　〇四五（八四五）一三七一
ＦＡＸ〇四五（八四六）二〇〇〇
印刷所　神奈川新聞社出版部

横浜善光寺